

明治大帝御製謹註 一三〇  
ばこそ、數千萬の國民は、何れも一旦急あれば喜んで 陛下の爲めに一命を擲つのである。

【一三六】 御題知らず

暑しともいはれざりけり煮えかへる

水田に立てる賤を思へば

炎天に水田は煮えかへるやうである、けれども農夫は物ともせず、田の中に立ちて、草を取りつゝ一生懸命に働いて居る、嘸耐へ難いことであらうが、これを思ふ時は、目を避ける家の中に在つて、何うして暑いなごといふ事が出来やうぞと、深く農夫の勞苦を思ひやり給うたのである▲古來我が國は農を以て立國の基とし、農夫は實に國の寶であつた、され

ば歴代の天皇は何れも深く農民を愛し給うた、陛下に於かせられても、斯くばかり御こゝろを彼等の上に注ぎ給うたこと、忝なしといふも愚な次第である、賤といふは、こゝでは農夫を指したまうたのである。

【一三七】 曉更鶏

空音かと思ふばかりに夏の夜の

あけがた早く鶏の音ぞする

まだ宵であるとのみ思つて居ると、何時の間にか明けて仕舞ふのが夏の夜である、空音は人の似ねた鳴聲のこと、夏の夜は明け易く、まだ夜明けまでには、なかく間があらうと思つて居るのに、早くも曉を報する

夏

鶏の聲が聞える、餘りに早いので、或は誰れか似ねて居る空音では無からうかと疑はれる位に夜が短いとの意。

【一三八】夏人事

窓の中に扇とりてもあつき日に

照る日をうけて小草刈る見ゆ

涼しい風の通る家の中に居て、扇を使つて居てさへも、眞夏の日は堪へ難いばかりに暑いのに、農民等は照りつける猛火のやうな日光を全身に受けながら、草を刈つて居るが、まあ何んなにか暑いことであらうと民の勞苦を見そなはして、そゝろに御あはれみの情を催されたことであらうと推し奉つると、御仁慈の程誠に畏れ多い。

【一三九】御題知らず

晝もなほ蚊のこゑしげし篋の

かげの四阿涼しかれども

篋は竹の生ひ茂つて居る所、竹の林或は竹藪のこと▼竹の生ひ茂つた中にある四阿は、照る日の光も射さないで誠に涼しくはあるけれども、その代りには、晝も小暗いから、蚊が澤山に居る、蚊の居ないやうな所は、暑くて堪へられず、涼しくて好いと思ふ處には、蚊の聲が繁つて困る、世の中には、都合の好いことは至つて少いとの意（四阿は屋根を四方に葺き下したる質素な小屋の事）。

【一四〇】川鮎

夏

玉川の逸き流れの底澄みて

さばしる鮎の數も見えつゝ

玉川は武藏の國を流れて居る、流れ早く水清き川である、河底まで水が澄んで居るから、中を泳いで居る鮎の數さへも一々數へられるやうであるとの意▲さばしるは走るといふに同じ、さは發語で別に意味は無い、鮎の敏捷に泳いで居る有様は恰も走るやうに早い、鮎は水清き急流に住む魚である。

【一四二】 夏の夢

ぬは玉の夢に再びむすひける

涼しかりつる松の下水

ぬは玉は夢に冠らせたる枕詞▼晝の間松の下蔭に湧く泉を掬んで、その涼しさに全く暑さを打ち忘れて真に好い心地であつたが、その心地の忘れ兼ねてか、夜の夢にまた同じ松下蔭の泉をむすんだといふ意▲むすひけりとは夢を結びたると水を掬いたるとの兩方にかゝる、水を掬ふとは水を掌に抄ひ上げること。

【一四三】 夏の燈

軒ちかく懸けつらねたる燈の

瞬くほどの風だにもなし

夏の夕、軒ちかくに懸け連ねられた燈は、岐阜提燈の類であらう、夕風そよくと吹いて、提燈の火の揺れる様は、涼しう心地よいものである



明治大帝御製謹註  
 一三六  
 が 何ゆへか今宵は風が更になく、幾何となく懸けつらねた軒の灯は瞬  
 きさへせぬ▲蒸暑い宵の有様を御咏み遊はされたものであらうと推し奉  
 つる。

【一四三】 夏 市

立ちつゞく市の家居は暑からむ

風の吹き入る窓せばくして

市の家居は市中の民家である、市中の民家は薨を並べ、軒を連ねて、櫺  
 の齒のやうに相接して、その間に空地が無いから、風の通ふ所もなく、  
 窓といつても狭くて、涼しい風の吹き入る可きやうもない、斯んな處に  
 住んで働く人は、夏は嘸かし暑くて苦しいことであらうと▲何につけても



人民の上に思ひを寄せ給ふ陛下の御慈愛は、感謝し奉つるも畏い。

【一四四】 夏 氷

厚氷もち運ぶ間に溶けぬらむ

盛りし器に水のたまれる

氷を器に盛つて 陛下の御まへに捧けた時、器の中に水の多く溜つて居る  
 のを御覧あつて、かやうの厚氷も、持ち運ぶ間に一方から解けたもので  
 あらうと思し召したまふを、直ぐ御製とせられたのであらう▲この日は  
 誠に暑い日であつたと思ふ。

【一四五】 夏 氷

夏

夏知らぬ氷水をばいくさ人

集へる庭に分ちてしかな

一度これを口にすれば、夏の暑さを打ち忘れて、蘇生るやうな心地になる氷水を、炎熱と戦ひ、敵軍と戦つて居る軍人どもに、分けてやり度いものであるとの意▲いくさ人集へる庭とは戦場をいふ、分ちてしかなは分けてやり度いと念ひ、戦役中の御製である、出征兵士の身を思ひやらせ給ふ陛下の御仁慈、一杯の氷を召し上げるにも、此の通りお優しい心を持せらるゝこと、眞に畏い次第ではないか。

【一四六】夏車

重荷ひく車の音を聞えける

照る日の暑さ堪へがたき日に



何事もせず只居てさへも、夏の照る日は暑くて耐へ難いのに、荷物を山のやうに積んだ重い荷車を曳いて行く音が聞えるが、如何に暑く苦しいことであらう、日々の職業とはいひながら、かほどの暑さを物ともせず、汗流して働くのかと、遠く響き車の音を聞き召して、賤き民草の上に厚き御同情を寄せたまうた御製である。

【一四七】夏車

さま／＼の重荷を積みて日に焼けし

いさこの上を車ひくなり

夏の日は炎々として、道路の上は猛火の燃え立つやうであるが、その上をさま／＼の重荷を積んだ車を曳いて行く、定めし暑いことであらうと、

夏



明治大帝御製謹註  
これは直接労働者の苦しげに働いて居るさまを見そはなし給うての御製。

一四〇

【二四八】 夏 庭

昨日かも切り下したるわが宿の

庭木の枝はまた茂りけり

わが宿の庭と仰せらるゝのは禁苑のことである、園丁が来て庭の木を切り下け、手入れをして行つたのは、ほんの昨日であつたやうに思うが、見れば早や新芽が生ひ伸びて、小暗く茂り合つたことよとの意▲夏は草木の葉の最も盛に繁茂する季節であるから、庭木など手入れをして置いたかと思うと、また直ぐに生ひ伸びて来る、みどりの若葉繁り合う禁苑の實況をお咏み遊はしたものであらう。



【二四九】 夏 竹

白露の風にこぼるゝ數見えて

朝日涼しき竹の下庵

竹の下庵とは竹の生ひ茂つて居る側にある家、庵は普通に假の住居をいふけれども、昔から歌詞として、普通の家のことにもいふ、こゝでは畏れ多けれど禁中の御坐所で宣はせられたものと察する、竹の葉末に宿る露は、そよくと吹く朝風にこぼれて、はらくと地上に落つる白玉の美しさ、登る朝日の光さして、竹下の庵は如何にも涼しい。

【二五〇】 庭 泉

夏

一四一

庭の面に清水の音は聞ゆれど

むすふいとまも無き今年かな

庭の面に聞ゆる清水は泉水である。夏の庭に泉水に依つて涼味を生ずる、むすふは掌に抄うこと、庭の清水をむすふは、泉水に涼むことである。今年に餘りに忙はしくて、庭に下りて悠々と涼を納れて樂しみ息む暇が無いとの御意を述べられたもの。▲國政に御勉勵あそはさるゝため斯ほどに御忙はしく在らせられたとは、聞くも畏れ多い次第である。

【一五二】夏 舟

日さかりに漕ぎつらねゆく川舟は

泳ぎに出づる子等の乗るらむ

日の照り輝いて暑い盛りに、幾艘も漕ぎ連らねて行く川舟が見えるが、あれは日に焦げて眞黒くなつた元氣な子ども等が、泳ぎに行くために乗つて居るのであらうとの意。▲眞晝中に川をゆく幾艘の舟を遠くから御覽遊はした時の御咏であらう。

【一五三】夏 花

百日さく花まはゆくも見ゆるかな

今やあつさの盛りなるらむ

百日咲く花とは百日紅、一名を猿滑ともいふ、花は眞紅、盛夏に開いて百日の間も續くと云ふ所から百日紅といふのであらう、又猿すべりといふのは、樹皮が滑かた、木登りの巧みなどいられる猿さへも滑り落ちる

夏



明治大帝御製謹註

一四四

といふ所から呼ぶやうになつた名であらう▼百日紅は見る目もまばゆい計りに花を開いた、今は暑さの真盛であらうといふ意▲真紅の花は燃る如く、夏の暑さは一層加はつたやうな心地がする。

【一五三】 夏 鳥

遣り水につばさ洗ひて日盛りは

からすも庭を荒らさざりけり

遣り水は庭園に流しやりたる水 これは禁苑の遣水であらう▼夏の暑い日さかりには、鳥も暑さに耐へかねてか、庭園の遣り水に羽を洗うて、庭を一向に荒さぬよとの意▲鳥は年中居て、木の芽を啄き、花の蕾をむしり、悪戯はかりするものであるが、暑さに閉口しては悪戯もせぬといふ

ので、其の暑さの程も察せられる。

【一五四】 夏 朝

朝の間に物學ばなむをさな子も

晝はあつさに倦み果てぬべし

夏でも朝の間は涼しいから、幼い子等も其の涼しい間に、勉強するが宜しからう、日がたけて晝の頃となり、更に晝を過ぎるやうにもなると、暑さが酷しくなつて来るから、心も身体も倦み勞れて、勉強など全く手につかぬやうになるであらうとの意▲をさなき子どもたちを訓戒し給うたのである。

夏

一四五





【一五五】 夏 夕

庭草に水そゝがせて月を待つ

夏の夕は思ふことなし

三伏の暑熱に照らされて、萎れ返つて生氣もない庭の草に、水を注がせて、端近う月の出るのを今かくと待つて居る間の夏の夕方は、真に涼しく心が地よい、心清く胸は澄んで、思ふことゝては何もないとの意▲御苑の夕、うち水に草木は蘇生つて、垂れた頭を再び擡げ、風そよよくと軒に音づるゝ時、うち潤がせたまうた御氣分を其のまゝ咏み出てられたものであらう。(三伏とは夏の最も暑い時の事)



【一五六】 夏 雨

あらかねの土さへ裂くる日盛りに

あな心地よや今の村雨

あらかねのは土に冠らせた枕詞▼夏の日が炎々と照りつける熱さの激しさに、大地も龜裂を生ずるばかりに日盛の最も耐へ難い時、思ひかけずも降る村雨の一しきり、今までの熱さは打ち忘れたかのやうに全身の汗をぬぐひ去つて、真に心地よく涼しいとの意▲夏は時々驟雨が降るので、暑い日さかりでも、この雨一過の後には、俄かに涼氣の至るを感じる。

【一五七】 扇

夏

日さかりは筆とることも懶くて

扇をのみぞ手ならしにける

太陽の光赫々として照る夏の日の眞晝中は、炎熱酷しくして、心は倦み体は勞れ、筆とることなど思ひも寄らぬ、書かねばならぬものがあつても、懶くて容易に筆とる氣になれぬために、たゞ扇ばかり使つて時を費して仕舞つたといふことである。

【一五八】團扇

青丹よし奈良の團扇は都にて

ありし時にや作り初めけむ

一首の意義は、奈良團扇は、その昔奈良が都であつた時分に、作り初めたものであらうといふ意、▲青丹よしは奈良に冠らせる枕詞、奈良扇は奈良春日の社人などの作るもので、頗る古雅の趣がある、我が國に於ける團扇の中では最も古いもの、古風で美しくて優しい、これを手に入れば、奥床しい感情が自ら奈良の都の古に馳する様である。

【一五九】御題知らす

燕飛ふかげのみ見えて田植時

家に人なき小山田の里

小山田の里は、田植時になると、家を明けて皆が田へ仕事に出かけるので、留守居をして居る者としては一人もない。何處の家もノ、空家同然、

夏

唯燕のみが時を得顔に、軒端を飛んで居るばかりである▲家を明け放つて置いても盗難の氣づかひもなく、農夫等が一生懸命になつて田に働いて居るさまは、實に平和で暢氣千万(小山田の里とは田舎の村里をいふ)

【二六〇】夜述懷

夏の夜も寝さめがちにぞ明かしける

世の爲め思ふこと多くして

夏の夜は短く、暮れたかと思へば直ぐ明ける、斯んな短い夏の夜も、世の爲め國のために、斯うも仕やう彼も仕やうと、さまざまの事を思ひ廻らす身には、安々と寝て休むことも出来ないで、いつも寝さめ勝ちであるとの御述懷、國家國民のことを思ほし給うては、御こゝろの安まる御



時としてなく、夜でさへ宸禁を惱ましたまふのである。

【二六一】夏草

空蟬の世に立つほどは夏草の

こと繁くとも厭はざらなむ

空蟬のは世に冠らせる枕詞▼夏は草の最も盛に繁茂する時である、夏草の繁きが如く、此の世の事はさまざまに繁くあるとも、決して之れを厭ふことなく、世に立つからは、成す可きことは之れを爲し、勉む可きことは之れを勉めて、責任のある所を完うし度いものであるとの意▲人のこの世に生れて来た以上は、個人としてまた國民として、各々盡さねばならぬ務めがある、これをうるさがつて居ては致し方が無い、如何にう

るさくとも務めは務めとして盡す可きである。

【一六三】 川 夕 立

水上や夕立ちすらむたに川の

ながれみなぎる音聞ゆなり

水上は夕立が降つたのであらうか、川の流れは音たかく、岸にみなぎつて居るよとの意である▲夏の夕たちは、颯と降る凄ましく激しい雨が降るかと思れば少時にして直ぐに霽れる、降る籠圍も極めて狭いから、川上に降つても川下は降らないやうなことも珍らしくない、こゝでは、谷川の水が俄に増して、岸に漲る音のするを聞き給ふて、川上に夕たちの降つたのであらうと推量し給ふ心である。

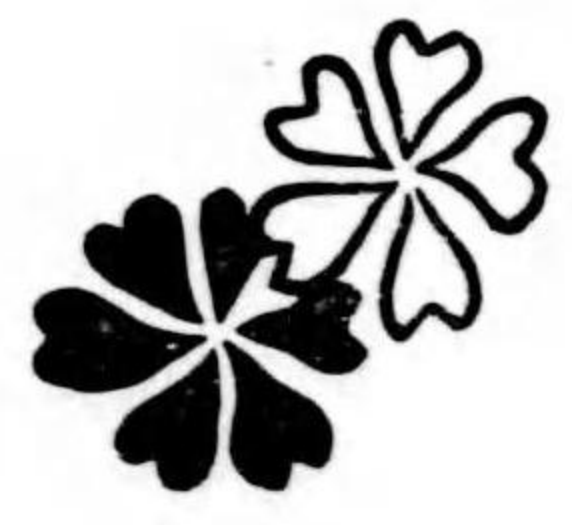


【一六三】 池 蓮

白鷺のおりたつ方も見えぬまで

池の蓮葉しげりあひけり

池の蓮は大きく圓い葉が繁り合つて、全く水の面を掩うて仕舞つた▼池には白鷺が居て、静かに遊んで居るのであるが、蓮の葉が餘りに繁り合つた爲めに、それに掩はれて、白鷺のおりたつ姿も見えなくなつたとの意▲夏の池の蓮は、今を我が世と思ふばかりに、葉をひろけて盛に生育する、そのさまは壯觀である。



秋

【一六四】新秋雨

露だにもいまだ結ばぬ草むらに

一むらそそぐ雨の涼しさ

秋に入ると草葉に露滋う結ぶやうになるが、まだ秋といふは名のみにして、残んの暑さ酷しい故に、草むらには露さへ結んで居ないのに折りから降り出でた村雨が、草葉の上になぐさまは、如何にも涼しく心地好いとの意。

【一六五】早秋風

秋



吹く風の音こそかはれ山の端の

明治大帝御製謹註

一五六

松も初めて秋や知るらむ

秋はまづ風に始まる、秋が来たとは、まだ目に見えぬ夏の終りで早くも其れと知らるゝは風の音である▼今日は秋となつて、風の音が昨日とは變つて来た、四季同じ常盤の色かへぬ山の端の松も、この風の音を聞いて、秋のおとづれ来たことを知るであらうとの意▲松は非情の植物であるが、これが感覺ある人間のやうに、秋の来たのを知つて驚くだらうと、感覺あるものゝ如くいひなすを文學では擬人法といふ。

【一六六】 初秋夕

夕つく日かけろふ森の木かくれに

ひぐらし鳴きて秋風の吹く



夕つく日は夕陽、かけろふは影さすことをいふ▼森は今夕日西の山の端に没せむとして、淡い光を射して居るが、その木かくれには、蜩が哀れな音を立て、鳴いて居る、折から夕の風がさやくと吹きわたる、如何にも寂しくなつた▲初秋の情景はまづ夕の風と蜩の哀れな聲に幕を開く。

【一六七】 垣秋風

枯れ蔓もいまだ拂はぬ朝かほの

垣根ゆすりて秋かせぞ吹く

朝顔は今や蔓枯れて、寂しい哀れな姿で、まだ取り拂ひもせず、そのまゝ垣根にからまつて居るが、秋月はその朝顔の垣根を揺つて、淋しく冷やかに吹きわたるとの意▲朝顔の蔓をとり拂はぬ頃はまだ夏の末で秋の

一五七



初めつかたである、昨日までは夏と思つて居たのに、今日は早や秋になつたかと、その移り變はることの早いのに驚かせ給うた禁苑の御即事である。

【二六八】 秋夜長

秋の夜の長くなるこそ嬉しけれ

見る卷々の數を盡くして

まだ宵ながら明けぬる夏の夜は、何を思ふ暇も無いが、秋になると次第に夜が長くなつて、氣候も又暑からず寒からず、心地よい夜長は最も書を読むに適して居る▼一首の意義は、秋か来て夜が長くなつたから、思ふまゝに幾巻もく書物を読むことが出来るのは、誠に嬉しいことであ

るといふにある。(巻は冊と同じ)

【二六九】 秋夜燈

秋の夜の長きにあかすともし火を

かかげて文字をかきすすきみつ

長い秋の夜に飽くことも知らず、燈火を上げて、さまざまの文字を書き耽けるとの意▲燈火をかゝげるとは、燈火の心かき上げて火を明くするをいひ、文字書きすすきむとは、心にまかせて書くことをいふ、秋の夜は心地よいから、机にもたれて居ると、氣が晴々しく、興が自然に湧いて來るので、筆をとり初めると、すらく書けてゆくものだから、思はず知らず夜を更かす、秋は眞に燈火に親む可き頃である。

秋



【一七〇】月明星稀

天の原みちたる星の影消えて

月のひかりになれる空かな

大空の廣きを指して天の原といふ▼見わたす限り廣々とした大空には、星が光幾千とも知れず、爛々たる美しさに輝いて居たが、その星かげは何時の間にか消え去つて、明皎々たる月の光が、天上に輝きわたるやうになつたとの意▲屋は暗の夜にこそ美しく輝くが、月がさし上ると全く光を失つて仕舞ふ、一天澄み渡つて水の滴るやうな月光を浴びた秋の夜の天地は美しく心地よい限りである。



【一七一】窓前蟲

草雲雀鳴きもぞ止むと秋の夜の

月なき窓もさされざりけり

草雲雀は草の中に雲雀のやうな聲をたゞて鳴く秋の蟲、鳴きもぞ止むは鳴き止めるかも知れないといふこと、さされざりは鎖れさりである▼一首の意味は、月なき秋の夜は、窓あけて居た所で詮方ない、鎖してもよいのであるが、折りから草雲雀が美しい聲に鳴いて居るので、もし窓を閉す音を聞くと、音いて鳴き止めるかも知れない、今斯んなに美しい鳴聲を聞き失ふのは如何にも惜しい、窓の戸はそのまゝ鎖さずに置くが宜からう、どうも鎖されないといふにあり▲奥床しき詩情では無いか。

秋





【一七二】 月前風

遠近に尾花浪よるかけ見えて

月澄む野邊に秋風ぞ吹く

尾花は薄の花、浪よりは花が風にうち靡いて浪の寄るやうに見える所を  
たとへていふ▼野べには月澄みわたつて、風そよくと尾花を吹き、花  
の動くさまは波の寄り来るやうである、美しい景色▲遠近に尾花浪よる  
とあるから、野べ一面に尾花が咲き連つて居るのであらう、月清く風さ  
びしき野べの夜景色が充分に浮び出て居る

【一七三】 月前蝋

有明の月もさし入る窓の戸に

影さへ見えて鳴くきりぎりす

月は空にありながら明け行く空を有明の空といふ、有明の月は斯る空に  
ある月、十六夜以後の月である▼夜の明け方、有明の月さやかに照る窓  
の戸に、姿まで見えて、菴が鳴いて居る、その聲は實に哀れ深い意もの。

【一七四】 野月露深

おく露の光になりて更けにけり

花野のすゑの秋の夜のつき

秋の花野は萩や尾花や女郎花などが咲き揃うて錦を織つたやうに美しい

が、夜更けては唯露のみ深ふ置き渡して、折りから照りわたる月の光に露は玉と輝いて居る▲満目只これ月の世界なる秋の野は、夜の更けゆくと共に露重く、月は露に輝いて白う光るものである。

【一七五】御題知らず

萩の戸の花にやどれる月かげは

賤がかき根もへだてざるらむ

萩の戸に咲いて居る花は、今を盛りに美しく、月はその上にやさしい光を投げて居るが、此のおなじ月かげは、賤か家のわびしい垣根にも、光り射して、それに咲く秋草の上をも照して居るだらうとの意▲萩の戸は其の昔清涼殿の東西に小萩垣の在つた所をいつたものであるが禁中には

今もなほ此の名稱が残つて居るのであらう、禁中の御苑の日を眺めたまうて、民の垣根に思ひ及ばれた御咏である。

【一七六】海邊の蟲

波の音遠ざかり行くひき潮に

蟲の音たかし濱の松原

夕陽西に落ちて、四邊淋びしう暮れゆく海邊は、静かに物の音もなく、たゞ引潮のみが遠き響きを送つて來るばかり、松みどりに沙白き海岸のあたりは淡黒色に其とも分らず、茲處彼處の草むらには、蟲が高い聲に鳴いて居る▲蟲は鈴蟲か、松蟲か、月まだ出でぬ夕の海邊に風そよよと吹いて、何となう淋しき景色である。

秋

【一七七】海上霧晴

音ばかり聞えし波の見え初めつ

浦わのさ霧晴れわたるらむ

今までは唯音のみ聞えて、一向見えなかつた波が、漸くほのりくと見え初たからこれは浦に一面にたなびいて居た霧が晴れかゝつたからであらうとの意▲浦わとは浦廻とも書く、海岸の曲り込んだ處をいふ、然し、單に浦といふと變りなし、さ霧は狭霧、さは發頭語にして別に意義があるのでは無い。

【一七八】御題知らず

松原の小暗くなりて秋の野の

尾花が末に月かたふきぬ

月は尾花の末に傾きかゝれむとして居る、先ほごまでは、月の光がさやかに射して、分明として居た松原は、次第に小暗くなつて來た▲秋の野の夜が、いたく更けわたつた時の景色である▲落ちゆく月の光や暗くなる松原の尾花の姿も淋しいではないか。

【一七九】御題知らず

遠近に藁うつ音も聞えけり

山田の里の秋の夜の月



明治大帝御製謹註

一六八

賤か住む田舎の村里は、空澄みわたりて、秋の夜の月清く、森も畑も一面に美しい光を浴びて静かな時に、農夫等が夜業に草鞋など作るのであらうか藁を打つ音が、あちらからも此方からも、とん／＼と聞える▲更けゆく里の秋の夜景色を興ありと御覽遊ばしての御咏であらう。

【二八〇】夕霧

堤ゆく人かけ絶へて墨染めの

夕霧ふかし寺島の里

堤は隅田川の堤、墨染のは夕に冠らせた枕詞である、寺島の里は寺島村で隅田川堤須崎の北に隣り向島の中央、南葛飾郡にある▼秋の日は最早暮れて、隅田川の堤には、行き交ふ人の影も絶え果て、仕舞つた、彼方



寺島の里には、唯夕の霧が深く立ちこめて、見わたす景色の淋しいことよといふほどの意。

【二八一】秋川

落鮎のながるる見えて桂川

すみまさり行く水の色かな

桂川は落鮎の形ちも見ゆるばかりに、水が澄んで清らかになつた、秋の漸く更けて行くに従うて川の水も亦澄渡りたる景色▲落鮎とは秋の末の方卵を産んで仕舞うと下流へ下つて行く鮎のこと、桂川といふ川の名は諸國に在るが、こゝでは山城の大井川の下流を桂川といふ、その川を指れたものであらう。

秋

一六九

【一八二】 仲秋の月

雲霧もかからざりけり大空に

今宵と満てる月のひかりに

今夜こそ仲秋である、大空一面に照り輝いて居る月の光には、一點の雲も霧も懸つて居ない、拭うたやうに晴れた空、滴たるやうに清い月、眞に心地よい眺である ▲仲秋とは陰曆八月十五夜、此夜の月を名月、或は明月と稱へて、何時の世から始まつたものか、七草、芋、團子などを供へて夜もすがら眺め樂しむことが都鄙一般の風習となつて居る、月の最も澄むは秋、殊に此の仲秋である、明皎々たる光の清く美しきは他に比類を見ないのである。



【一八三】 秋晴

水こえし里の濕りげ乾くべく

秋のみ空よ晴れつつかなむ

賤住む村里は、洪水のために川の水が堤を越えて、田に畑に路にあふれ、家を浸して甚はだ難氣をしたであらうが、水が引き去つた後も、なほ濕り氣が乾き去らない、秋の空よ、幾日もく晴れつゝいて、里の濕りげを乾かせよと、秋の空を心あるものゝ如くいひなして、話しかけたまうたものである ▲出水の後に濕りげは種々なる病菌の發生を促し、誠に恐る可きものであるから、近來は何處でも心を用ゐて清潔法を行ふが、最も有効なのは、強い日光が照りつゝいて、全く濕り氣を取り去ることである。

秋

明治大帝御製謹註  
ある、下民どもの上を御氣づかひ給うての御製と拜察する。 一七二

【一八四】 秋 風

荒しとも思はざりしを芭蕉の葉

吹き破りたり庭の秋風

ゆうべの風は左程荒々しく吹いたとも思はなかつたが、けさ起き出で見れば、庭の芭蕉の葉を吹き破つて居るよとの意▲芭蕉の葉は誠に破れ易いものであるが、秋風は静かなやうでも強う吹くもの、朝禁苑に立ち出てさせての御即事であらうと思はれる。

【一八五】 馬上紅葉

鞭たば紅葉の枝に觸れぬべし

駒をひかへむ岡越のみち

岡越の路の両側には美しき秋の紅葉があるが、路が甚だ狭いから鞭ふり上げて打うものなら、鞭先が觸て紅葉は散であらう、馬は勇むて走するまゝに、これまた紅葉を散らすであらう、これは誠に心ない業であるから、若かず、こゝに駒を控へやうと、風流の御心▲秋季大演習などの折りに御咏み遊ばしたものであらう、岡越の路とは小高き丘に附いて居る路。

【一八六】 秋 風 寒

富士の根に初雪みえてうち日さす

都も寒き秋かぜぞ吹く

秋



明治大帝御製謹註

一七四

富士の根は富士の峰、うち日さすとは美しき日の光さすことの義で都に冠らせた枕詞▼富士の高根を見ると早や初雪が降つて、都にも寒い秋風が吹きわたるやうになつたとの意▲宿土山は海拔一萬二千四百六十尺、我が邦の高山である、空のよく晴れわたつた日には、都からその雄々しい姿が見える、秋晴の日、遠く嶺の白雪を眺めたまうての御詠であらう。

【二八七】 故郷草花

園守やひとり見るらむ昔わか

あつめし庭の秋草の花

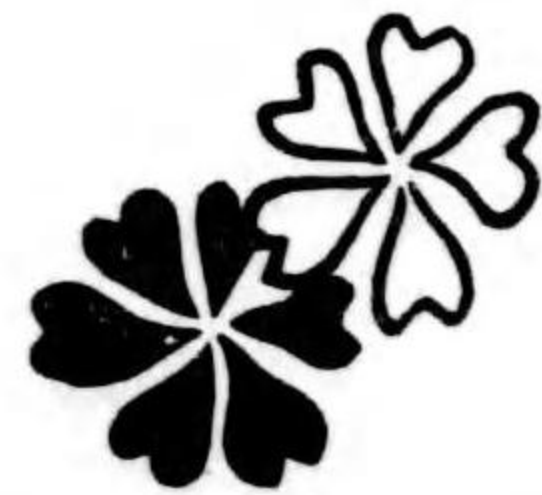
今は留守居をして居る園守のみが、さびしく眺めて居ることであらう、昔わが集めて植えて置いた庭の秋草をとの意で、これは陛下が、其の昔



御住ひしたまうた京都の御所を御追懐遊されての御詠であらう、秋が来て禁中の御苑に、美しく咲揃うた秋草のとりかゝりに可笑きを眺めたまふにつけても、昔京都におはせられた頃、處々方々から取り寄せて、秋毎に咲く花の美しさを賞翫し給うた、其花は今も昔しの如くに咲いて居るだらうにと、懐しく思ひやらせ給うたのである。

秋

一七五



冬

【二八八】江寒 蘆

難波江の蘆の枯れ葉におく霜の

深くも冬はなりにけるかな

今日この頃、難波江の蘆の枯れ葉には、おきわたす霜の漸く深くなつて、冬も次第々々に深くなつて來との意▲深くもとはおく霜の深きと冬の深きとの兩方にかゝる、蘆の枯葉は見るから寒けがする、霜ふかくなりては、げに冬は深くなつたとの感を催す、荒涼たる光景。

【二八九】池水鳥

冬



冴ゆる夜の月の光に池水の

みぎはの鴨の數も見えつつ

寒き冬の夜である▼冴えた月かげは、皎々と輝いて池の上を照らして居る、池には鴨が幾羽ともなく浮寝して居る所に月の光が明かに照つて居るから、みぎはに居る鴨の數も明瞭に數へることが出来る▲空晴れ夜は靜かに、池の水は鏡の如く、見ゆるかぎりのものが總て光るやうである、清らかに照る月は思ひ切りて凄くまた淋しい。

【一九〇】水鳥群

葦鴨の群れて浮べる池の面は

つばさの風に浪や立つらむ

池の面には幾羽とも數知れぬ葦鴨が、遊びながら群れ浮んで居る、日は靜かに、風も吹かぬ穩なる水は、浪立つべき筈はないが、葦鴨の飛び立ち或は下り浮ぶ羽風のために、盛に浪が立つであらうとの意▲羽風で浪が立つといへば、随分多數の葦鴨が群れて居ることゝ察せられる。

【一九一】曉千鳥

磯崎の波間の月のかげ落ちて

あかつき寒く千鳥啼くなり

磯は濱べ或は波うち際、崎は水中に空き出でたる陸地をいふ、こゝに磯崎とあるは土地の名と解しても、又單に濱邊と解しても可からう、皎々冬



明治大帝御製謹註

一八〇

たる寒月はさえて波間を照して居たが、何時しか落ちて光消えた、今は  
曉でゐる、寒さは愈々加はつて来た、波間にねむる千鳥も此の寒さには  
堪へ得ないのであらう、聲もいと哀れに鳴いて居る▲夜明け方の寒さ、  
寢床の中にあつて、枕に通ふ千鳥の音を聞いては、心も氷るやうに覺え  
ものである。

【一九二】濱千鳥

汐風をつばさにかけて冬の夜の

長濱つたひ千鳥なくなり

沖は汐風吹いて寒い夜である▼濱の千鳥は寒い汐かせをつばさにかけて、  
夜もすがら長濱つたひに啼きわたつて居る▲長濱は長くつゞいて居る濱

べ、冬の夜の氷るやうな夜寒に、夜ふけてまでも鳴きわたる千鳥の聲を  
聞くのは、實に淋しく、寒さも一層に感ぜられるものである。

【一九三】葦間薄氷

霜枯れの葦の葉さやき吹く風に

むすび初めたる薄氷かな

冷たい冬の風が、霜にうたれて色ついた葦の枯れ葉を、そよくと吹き  
わたるので、葦間の水は、その寒い風に、薄氷を結び初めたとの意▲風  
ふいて枯れ葦が動く冬の水邊は、さびしく寒い眺めであるが、氷の結ぶ  
やうになつては、更に冷たさを加へるものである、唯枯れ葦に風と聞いて  
さへ、心は言ひ知れぬ淋びしさを感ずる。

冬

一八一



【一九四】氷留水聲

山川の水は氷の閉ぢ果てて

風の音のみ高きころかな

山川とは山の間を流る、浅き小川で冬は水も凋れくである▼昨日今日の寒さに、小川は一面に氷となつて、常はさゝやかな音に流れて居る水も、音を絶えて、唯風のみが激しう吹き荒れて、淋しい聲を立て居る▲山間の冬景色は木は枯れ、山は痩せ、石冷たう、四邊の光景は誠に荒涼として物さびしさの限りである。

【一九五】池厚氷

風さわぐ池のみぎはの厚氷

浪の姿にむすびけるかな

寒い風が吹き荒んで、池の水ぎはに寄せ来る波は、大波小波の一起一伏、返へしては寄せ、寄せてはまた返へす姿さまざまであるが、池のみぎはに張つめた氷は、其の波の種々なる形のまゝに、結んで居るよとの意▲厚氷は木く結んだ氷である、それが波の姿そのまゝにとは、いととも趣ある御観察で、誠に面白う拜誦さるゝ御咏である(みぎとは水キワの事)

【一九六】氷満池上

池水は氷らぬ方も無かりけり

いづこか鴛鴦の夜床なるらむ

冬



池の水は、寒いために、残る方なく氷が張りつめて、波などが見える所  
としては、少しもないやうになつて居る、水の面に浮び、波間を寢床とし  
て夜を明かす鴛鴦は、あはれ、いづこを夜の床とするであらう▲夜床とは  
夜やすむ可き臥床をいふ、鴛鴦はおしとりともいふ、雌雄常に連たつて、  
水のほとりに住む、鴨に似て少し小さい鳥である。

【一九七】 庭 落 葉

木枯の吹くたび毎に散り積る

庭の落葉はいくへなるらむ

秋が暮れて冬になると、木々の梢を吹き渡る寒い風が荒ぶ、木枯は此事  
である▼木の葉はこの風で悉く吹き拂はれて仕舞ひ、梢を離れて枯れ葉



は、ひらくと地に舞ひ落ちて、うづ高く積む、掃きもせず、そのまゝ  
に打ちやつてある庭の面は、散る落葉の重り／＼て今は幾重になつたこ  
とであらうか▲木からの盛に吹きすさぶさまを御覧じての御製か。

【一九八】 田 家 時 雨

苧りのこす山田の晩稻うちなびき

寒きあらしに時雨ふるなり

山里の田には、刈りのこされた晩稻が、寒い風に吹かれて、伏すやうに  
打ちなびいて居る上を、時雨が降りそゞいで居る、如何にも物さびしく、  
寒げな光景である▲田は大方刈りとられて、晩稻は只彼方此方にのこさ  
れて居るに過ぎぬ頃、嵐に誘はるゝ時雨の爲めに、初冬のさびれた片山

冬

明治大帝御製謹註  
里は、満目すべてこれ荒涼の天地である。

【一九九】 寒夜重衣

冬深き閨のふすまを重ねても

おもふは賤か夜寒なりけり

寒い冬の夜は、風も漏れぬ様に造つた家の閨に幾重の衾を重ねても、暖かく安らかに眠られぬほどの寒さである、それにつけても思いやられるは賤が伏屋、隙も風を防ぎ兼ねて、身に被ぶるものも軽からう故へに、定めて夢も覺め勝であらう▲これは陛下が寒夜賤しき下民の夜寒に苦しむ状態を思しやらせ給うて、深き御仁慈の情を寄せられた御製である、その昔、御衣を脱ぎ捨てさせ給うて、寒い夜に民の苦痛を忍ばせ

られた君も在したと聞き傳へて居るが、陛下の御心やさしさは、承はれば承はるほど、有り難く涙のこぼるゝばかりである。

【二〇〇】 寒夜風

窓の戸を叩く嵐の音さむし

池の氷も今か閉づらむ

外には冬の嵐烈しく吹いて、閨の窓の戸を叩く音も寒く、身に泌みわたるやうである、斯んなに寒いから、今夜あたりは、もう大方池の水は氷で閉ぢることであらう、▲今かとは、大方または多分といふ意味を含めて、今夜は多分もうとか、もう大方とか、いふ解釋になる、閉づらむとは池の水が氷で閉ぢるであらうといふこと、氷が張りつめるであらうと

冬

【1101】 爐邊述懷

埋火をかき起しつゝつくくと

世のありさまを思ひけるかな

埋火は灰の中に埋めた炭火をいふ、火鉢の火である▼長き冬の夜寒に、  
寝もやらず、火鉢の火をかき起しつゝ、世のありさまをつくくと思ふ  
との意▲世のありさまとは、國家の狀態や國民の動靜や國內諸般の事柄  
は如何に、外國に對する關係は如何にと、總べての事に御心を注がせ給  
う故に、それ等を一括して申された御言葉、陛下には斯も國家國民のこ  
とをのみ御ころに留めさせられて、お休み遊ばす暇もないほどであつ



た、我れく國民たるものは、深くこれを胸にとめて、各々陛下の聖慮  
に添ひ奉つる覺悟なくてはならぬ。

【1101】 歲暮近

あら玉の年の終も近づきぬ

暑し寒しといひ暮す間に

あら玉のは年に冠らせる枕詞▼夏が来れば暑いくといひ、冬が来れば  
寒いくといふが、そんなことを言つて居る間に、早や今年は暮れて仕  
舞つた、さてく月日のたつのは夢のやうなものであるとの意▲年末の  
御所感である、げに昔の人も言ひけむやうに、光陰矢の如く、日月流水  
に似たりで、年月の過ぎ去るは早く、過ぎ去つた歳月を顧みると、恰も

冬

夢のやうな心地がする、年の終りに一年中にあつたことや仕て来たことを考へ起す時、人はその餘に空漠たるに呆れることが多いものである、年末にあつて此の感なき人は、無心經の人であるが、そんな人は實際に至つて尠からうと思ふ、努力せざる可らずとの念、於茲乎起る。

【三〇三】 爐邊述懷

更くる夜の霜ふむ人もあるものを

火桶にのみや凭り明すべき

冬の夜の更けて寒さが身を刺すやうな時にも、冷たい霖を踏み碎いて、營々として働く人もあるのに、何で寒いからというて、火鉢にばかり凭れて居られやうぞ▲とは、陛下が冬の夜の寒さにつけても、數多き人民

の苦痛のほどを察したまうて、深く憐れませ給うた御製である、斯んな寒ひ夜にも働いて居る人民のあればこそ、國も安く治つて行くのであると、御憐れみの中にもお歡びの心がおはしますであらうと恐察し奉つる。

【三〇四】 風前雪

吹き迷ふ風のまに／＼誘はれて

家のうちまで積る雪かな

吹雪の日である▼風は野山から里に吹き、雪は風に吹かれて花と散る、何處より来て何處に行くとしも知らぬ嵐は吹き迷うて野にも行かず、山にも去らず、庭の木すへをさら／＼と吹き、軒を吹いて人住む家の窓に入る、風のまに／＼誘はるゝ雪は風が東に吹けば東に、西に吹けば西に、

冬



明治大帝御製謹註

一九二

木すへを吹けば木すへに、軒端を吹けば軒端に白花の亂れ飛ぶやうに吹かれて行く、吹き迷うた風は逃げ場を失なつて、凄しい勢ひに家の中へと吹き込む、風の誘つて来た雪は其處に散つて高く積む▲これは吹雪の日に観る實景である。

【二〇五】 月前雪

月白く冴へたる庭と思ひしは

隈なく雪の降れるなりけり

曉の月白う冴へた庭の景色は月は高く、空寒く四隣寂として聲なき時に窓または椽の戸を押し開て眺めるほどの人は趣味の人である、詩歌の人である、曉の眠り醒めて床をぬけ出でた折り、我等は斯んな景色を見



ることがある 月は白い、冴へた月かげの庭を照らす時、庭の面は晝間とは何と無う違つた趣がして、木、石、水などの姿が立たずまひ、色も別に、言ひ難き一種の妙がある、實に月の庭には趣がある▼夜明前に起き出で給ふて、興ありと見て御座つた 陛下は驚き遊ばした、月が冴えて庭が明るいのだとのみ思つてお在でなされたが、少時して御氣が附くと、明るいのは月の光りで無く、降り積つた雪のあかりであつた▲庭の一面に白う隈もなく降つて居る、月なき時でも雪の降り積つた夜は明るい、これを雪あかりといふ、寒いけれども雪夜の闇路は行くに便である、月照る夜の雪は更にまた妙、月は雪を照らし、雪は月に輝いて夜ふけた頃は凄いやうである、これ皆詩歌の領、詩歌の趣味に富せられたる 陛下は幾首となく自然界の佳色妙景を御咏み遊ばしたのである。

【二〇六】 山家雪

冬

一九三



山里の軒のかけひの音はして

雪静かなる朝ほらけ哉

山里の家は篋を掛けて谷水を取る、井戸も掘らなければ水道など素より無い、谷の水は清くして、山里の人はこれを茶に煮て飲む、かけひは地上に架設して水を通ずる樋、山里へ行つて見ると流れゆく谷水や湧き出づる泉の清き水が、岩石木立の間を縫へる懸樋をつとて人の住む家の庭に来る、庭には水溜があつて、篋の水は音立て、其れに落ちる、山里の家は晝なほ静かであるが、夜は更に静かである、夜半夢さめて軒端に落つる篋の音を聞くなどは、昔の歌人が幾回歌に咏んだか知れない▼今この御詠は山家の雪の朝である、篋は雪に埋もれて水の音のみ軒に聞えて居る、さらでだに静かな山里の夜あけがたは、雪ふる故に更に静かな



朝ぼらけである▲朝ほらけは朝開けにて、夜のあくる時即ち明方をいふ、静かな雪の夜あけがたは聞くものとは軒のかけひの音ばかりで、静寂の御歌である。

【1107】 田家雪

足曳の山田の庵の竹柱

傾くばかり積る雪かな

足曳のは山坂に冠らされたる枕詞、山田の庵は田舎の家、庵といふのは草木を結んで造つた假の住居である、竹の柱に茅の屋根、雨ふれば漏り、風吹けば傾く家▼其れに雪が重く降り積んだのであるから、庵の竹柱は其の重みに堪へ兼ねて、傾くばかりに危くなりて居る▲歌の意味はこれ

冬





で盡て居るが、さて餘談を申せば斯る危げな假に結んだ庵の中に住む人々が互に和樂の喜びを得て居るならば、外には雪や嵐が烈しくとも、彼れ等の生活は平和である、巍然たる幾階の大夏高樓に起き伏して、現世の榮華を一身に集めて居るかの如く見える人と雖も、若し心に和樂を缺き、不安と憂愁とに攻められて居るならば、田家の貧しき人の生活にも劣つて、遙かに不幸である、然しこれは餘談、庵の竹柱も危いばかりに降り積もつた田園の雪景色を心ゆくまでに描き出し給ふて居る。

【二〇八】鷹狩雪

降る雪のしらふの鷹を手据えて

朝狩きそふ冬は來にけり



しらふの鷹とは、白のまだらのある鷹のことなり、むかしは鷹狩といつて、鷹を手飼にして置いて、これをもつて狩りをして居た、媒鷹は飼主に好く馴れて、充分に訓練がしてあるから、飼主の手から放たれると、諸方に飛び廻つて他の鳥どもを捕へ、再び飼主の許へ歸つて來る、鷹狩はまた鷹野ともいふ▼冬になると狩の好きな人達は、各々飼ひ馴らした手飼ひの鷹を手載せて、我れ先きにて競ひ合つて野に出かける、今やその鷹狩りに好い時機となつた▲朝狩りは朝早くする狩りである、冬の朝寒さを犯して先きを競う朝狩りの樂しみは、又格別のものではあつたであらう、待ち構へて居た人々には、此の時機が眼前に到來した時、如何に心勇み立つたであらうと、その冬の心持ちを陛下はお咏み遊ばしたものと察し奉つる。

【二〇九】霰

冬

山風に吹き下されて今日もまた

ふもとの里は霰降るなり

冬の山風は寒い、その寒い山風が峰の方から麓の方へ吹き下して来る、麓の村は木立も枯れ、流れも細くなつて、刈りあとの田は廣く、すべての景色が物さびて居る▼處へ此の三四日は、寒い山風に霰が、ばら／＼と降るが、今日もまた催して来た▲風の聲、霰の音、空は暗く、野も暗い、村の里人は冬こもりして、外には物の影も見えぬ日の御製。

【三〇】雪埋松

海原はみどりに晴れて濱松の

木ずゑさやかに降れる白雪

白凱々と降る雪は、海も山も島も松も、すべてのものを一つに包んで居たが、やがて積んで終ふと、空は晴れ、山の形も島の姿も、見ると共に、海は緑の波うつしく、濱べに茂つた松の梢は、白雪を載せて居る、みどりの波と白雪との景色▲みどりは益々みどりに、白雪は愈々色あざやかである、常盤の松に積だ白雪はまた此上なき眺めであるが、それに海が配合されて居るのだから、更に一層の好景色となるものである。

【三一】月照雪

消えのこる松の木かげの白雪に

さす影寒し有明の月

降りつもつた雪はやがて消えたが、日かげも射さぬ松の木のかげには、ま

冬



だそのまゝに消えもやらず、白う残つて居る、その上を夜あけ方の月が斜に照つて、つめたく淋しげに輝いて居るさまは、如何にも凄いやうに寒く見えるとの意。

【三三】 船中雪

漕ぎ出でて船の中より見渡せば

雪おもしろし浦のまつ原

遠く沖の方へ漕ぎ出でて、船の中から見わたすと、濱への浦つたひに、長く連なつて居る松原の雪景色が、如何にも美しく面白う眺めらるゝとの意 ▲ 唯に雪景色のみに限らず、海岸の風景を、沖の方から遙かに見わたすときには、何となく面白う思はれることが多い、殊に雪の降つて居



るありさまは、雪のない海の中から眺めると一段の興を覚えるものである。

【三三】 車上雪

賤の男がひとり曳き行く小車の

重荷の上につもる雪かな

雪の降る日、賤の男がひとり重たげに曳いて行く車の重荷の上に、雪が重う積んで居ると御覧じての御咏 ▲ 雪の日なれば路は悪からう、寒いのは勿論である、斯んな日に重荷を積んだ車を曳くは、定めて難儀なことであらうが、積んだ車の重荷の上に、雪が降り添つては、更に車の重量が増して、一層重く感ずることであらうと、賤民が勞苦の程を思ひやらせたまうて、そゝろに憐れを催され給ふた御製と拜し奉る。

【三二四】寒月照梅花

照る月の光は未だ寒けれど

春にかはらぬ梅か香ぞする

寒月の大空高く照りかゝやく光は、見るからに身を振はすやうに冷たいが、梅は春にかはらぬ香を放つて居るとの意▲まだ冬であつて月の光は寒く身に沁みわたるやうであるが、梅は已に蕾を開いて居る、元來梅は春吹くものにしてあるけれ共、早咲のは大抵冬から微笑み初める、然し冬といつても、梅の咲く頃はもう春に近い、月は光寒くても、梅の香の高きを嗅いで、何だか早や春らしい心地もするやうである。



【三二五】早梅

梅の花咲けるを見れば降る雪に

冬こもる身のはづかしき哉

早咲の梅は、雪の降りしきる中に、姿清く、色うつくしく高き薫香を放つて居る、これを見ると、唯寒いくと言つて、冬こもりして居る身が、耻かしくて堪らぬ▲冬こもりとは、家の中に閉ぢこもつて火によりながら暖まつて居るのを宜はせ給うたのである。

【三二六】雪中早梅

降りつもる梢の雪を拂はせて

けさこそ見つれ梅の初花



明治大帝御製謹註

二〇四

梅は嚴寒に花を開く、實に春の魁である、郁として薫るその清香は眞に人の心を高くする、艶なる花の姿は萬葉の櫻に見ることが出来るが然しながら端然として君子の如き容は唯梅のみの専有である、早咲の梅が寒風に蕾をふくらせて一點二點綻び初めたのは、紅梅もよし、白梅もよし、其梅が雪ふる空に咲きにほふた時、雪の白さと梅の白さと、此の調和は眞に崇高の美である、降りつもる梢の雪は重く花を埋めて、梅は咲きながら其の花は見えぬ、若し夫れ雪の自から消え落ちる時を待たならば、花は最早散つて仕舞ふ、散つて後の梅は何の興も無い、殊に初花の妙は雪を拂はなくては其の佳を讀することが出来ぬ▼雪の爲めに梅は咲きながら花の姿をかくされて、見る花もなかつたが、今朝は梢の雪を拂はせて漸く梅の初花を見たとの御即興。

【三二七】待

春



旅立たむ日はまだ遠し早咲の

うめの梢はふくみたれども

早咲の梅はまだ年立たぬ内から已に蕾をふくらせて居る、梅は春の魁で、梅咲くと共に、春は此の世に訪づれる、然しながら、早咲の梅は梢に一輪二輪笑み初めても、マダ日が経たなくては氣候も寒く雪も降り出でやう、とても野や山を行くに便な時でない、旅は春、吹く風も和く、百花亂れ咲く頃でなくては駄目である▼此の一首は、早く春の來れよかしと、旅立つによき春を待つ心を咏み出でさせたまうたものである。

【三二八】田家霜

冬

二〇五

賤か家の軒端に高くつみ上げし

新わら白く霜降りにつけり

山里の農夫どもが住む家の軒端に、高く積み上げたものは、秋獲り入れた稲の新藁である▼冬が来て、その高く積み上げた藁の上に、霜が白く降つた光景▲よく實況をうつし出させ給ふて居る、何處如何なる時、かゝるさまを見そなはせたまうたものであらうか、御即事の御歌と拜しまつられる。



雑

【三一九】 鏡

榭葉にかけし鏡をかゝみにて

人もこゝろを磨けとぞ思ふ

榭葉は眞榭のこと、昔我天祖天照皇太神の天岩窟に御籠り遊ばした時、多くの神々等が天祖を慕ふて御出臨を祈り奉りた時に神鏡を掛けたものである、其鏡は、清かにして一點の曇つた所もない、見るから實に神々しい▼人も此の鏡を手本として、心の鏡を清かにし、一點の曇りもないやうに磨いて行けとの意▲心の鏡を清くするとは、胸に邪惡の念を

雑





絶つことである、世俗のために迷はされず、物慾を御け、すべて汚れたることを思はぬやうになれば、心は鏡の如くなる、こゝに於て始めて眞の人たる價值を生ずるのである、凡そ人の人として價值ある所以は、富貴、利達、名譽等ではない、實に清かな一點曇もない心である、これなき者は、即人としての充分なるものでない。

【三〇】 劍

ますらをが常に鍛ひし劍もて

むかふ醜草薙ぎ盡すらむ

ますらををば勇敢なる男の子、こゝでは軍人を仰せられたものである、醜草は敵兵▲一首の意は、我が勇武比類なき軍人たちは、日頃から鍛うて居た劍抜きかざして、刀向う敵兵を、恰も草を薙拂うやうに、切り拂ひ



追ひまくつて居ることであらうといふにあり▲日本では昔から劍は武士の魂としてあつて、いつも劍を手はなさず、一旦急ある時は、身を擲つて戰場に出て居た、その氣風は、今日もなほ帝國軍人の間に嚴然として存在して居る。

【三一】 教

開けゆく時にいよく仰がれぬ

ひじりの御代の高き教は

今や世は文明大に進み、國運益々開けて來たが、斯くなつて來ると、愈々古の聖皇の御代の高き教が、貴く仰がれるとの意▲賢明におはしませし陛下には、銳意國運の發展に力をお盡し遊ばされた結果、我が邦は





明治大帝御製謹註

二一〇

實に古今未曾有の大進歩大發達を遂げ、猶いよく隆盛に趣くの歡はしき状態を、深く御満足あらせらるゝと共に、將來更に一層の向上發展を望ませらるゝにつけ、先聖の御遺訓を染々と情にお慰び遊ばした所から、この御製を咏じ給うたものであらう。

【三三三】 忠

空蟬の世は安らかに治まりぬ

われをたすくる臣の力に

空蟬のは世に冠らせた枕詞、今や世の中は無事平和に治まつた、誠に喜ばしく嬉しいことであるが、これは全く朕を助けて呉れた國民の力である。▲功を臣下に譲らせたまうて、御自分の勝れた御力に就ては、更に何



ごとも仰せられぬ、此の御謙遜は、我れ等國民の仰いで大に感激し奉る處である、同時に愈々國家のため、又皇室の御爲め、有ん限りの努力をなし、御鴻恩に酬ひ奉つる處がなくてはならぬと思ふ。

【三三三】 武

弓矢もて神の治めし國人は

事なき世にも心ゆるぶな

我が日本の國は、皇祖皇宗の武を以て治め給うた國であるから、國民たる者は、此の心をわすれず、平素何事もない太平の時にも、油断して武事を怠つてはならぬとの意▲治に居て亂を忘るなどの聖訓である、弓矢とあるは武器を總稱したる名、神の治めしとあるは、代々の天皇は皆御

雜

二一一



明治大帝御製謹註

二二二

崩御の後、神とならせ給う所から仰せられたものであらう、日本は神國と稱へ、建國の初めは神の御自ら治めたまうた國といひ傳へられて居る、四方の服従せぬ者どもを打ち平げたまうて、建てられた國であるから、尙武を以て一國の精神とす可きは當にその處である。

【三三四】 仁

國のため仇なす仇は摧くとも

いつくしむべき事な忘れぞ

我が國家に仇する敵は、打ち碎かねばならぬけれども、敵の軍兵に對しては、決して残忍無暴なことをせず、仁愛の心を忘れてはならぬぞとの御訓戒である ▲明治三十七八年役の際の御製と承はる、敵の軍兵と雖も、



その國の爲めに働いて居るので、其仇する行爲は惡む可く、懲すべきであるが、軍兵その者に對しては、何等罪す可く憎むべき所は無いのであるから、戰爭中敵の負傷兵等を残酷に扱うてはならない、上御一人この御精神でお在でなさるから、日本帝國の軍隊は未だ敵に残忍であつたとの批評を受けたことが無い。

【三三五】 樂

千よろづの民と共に樂しむに

ます樂はあらじとぞ思ふ

天下の萬民が樂しむとする所を朕も樂しむとして、共に樂しむより以上の樂みは無いとの意 ▲我が陛下に於かせられては、我れ等國民の父と

雜

二二三

して、國民を子の如くに愛したまい、居常片時たりとも國民のことを忘れたまはず、國民と休戚を共にし給ふが故に、國民の不幸は御自身の御不幸として悲しませられ、國民の樂しみはまた陛下御自身の樂しみて喜ばれ給ふのである、國民が常に太平を喜び、平和を樂しんで居れば、陛下にはこれに増した御樂しみまた御喜びは、他に何も無かつたのであらうと拜し奉る。

【三三六】 天

淺みどり、澄みわたりたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

澄みわたつた大空は、淺みどり色に、一片の浮雲もなく、見わたす限り



廣々として居る、この大空の如く、わが心を廣く持ち度いと御ねがひ  
▲まことや天空一碧、如何なる高山も大海も此の地上にあるものは悉く  
掩はれてその下にあり、之れ等のものを包んで、なほ何等の狭さを感ぜ  
ない大空を心とすれば、下に對して寛宏同仁、如何なる出來事に際して  
も泰然自若、憂患の日にも、苦難の時にも、決して心に動搖を起さない、  
英明仁慈におはせられた陛下が萬機を總攬し給ふて、國民に莅みたまふ時、  
此の御希望を持たせられたといふことは、誠に忝なく我れ等の感泣を禁  
じ得ない次第である。

【三三七】 神 祇

目に見えぬ神の心にかようこそ

人のこゝろの誠なりけれ



至誠天地を動かすといふことがある、此の御詠は此の心を三十一文字にうつされたのであらう、▲人の最も尊ぶべきは心のまことである、心さへ誠であれば、見えぬ神のみ心にも感應するであらう、心の誠はこれ聽て神に通う一路である、誠なくしては人は到底、目に見えぬ神の御姿を拜することは出来ない。

【三三八】 讀書

今の世に思ひくらべていその上

ふりにし書を讀むを樂しき

今日の時代の状態と比較して、古書を讀んで見ると、治亂興廢の由つて來たる所、世態人情の推移し來たつた跡が、歴然として充分に了解され



るから、まことに楽しいことであると仰せられた御詠であるが、楽しいとの御言葉の中には、單に面白いといふことばかりでなく、趣味あると共に利益もあることを含まれて居ると思ふ、いその上は古にし、古にし書は古人の書いた歴史上の書籍であらう、陛下には、日頃御熱心に和漢洋の古書を御覽になつて居たと承はる。

【三三九】 勉學

暇なき身も朝夕にいそしみぬ

おもひ入りたる道の爲めには

日々國政を司らせたまふ御忙はしさに、暇としては無い御身ながら、一旦決心して、その奥にまで分け入らうと思ひ立てた學問の道のためには、



明治大帝御製謹註

二一八

朝夕御勉強遊ばされたことをお咏み遊ばしたものの、いそしみぬは勉強したとの意、思ひ入りたるは、決心して研究を始めたこと。

【三三〇】祝言

うけつぎし國の柱の動きなく

榮ゆる代々をなほ祈るかな

皇祖皇宗より繼承し來つたわが日本國の基礎は、更に動搖することなく、年と共に盛大に越きつゝあるが、今後幾年の後までも、榮えてゆくことを祈るとの意▲我が帝國の國運は、陛下の御代に至つて、古今未曾有の進歩發展を來したので、深くこれをお喜び遊ばされると共になほ陛下の後も代々かくの如くあれかしと、心に願はれたのがこの御製である。



【三三一】寄道祝

葦原の瑞穂の國のよろづ代も

みだれぬ道は神ぞひらきし

我が日本の國を葦原瑞穂の國といふ、葦原は又豊葦原ともいひ、上古未開の時、葦が生ひ茂つて居た所から此の名あり、瑞穂の國は五穀の瑞々しく美事に出来る國といふこと、みだれぬ道は葦の縁語で秩序正しき道といふことである▼さて一首の意は、我が日本國は、君臣の道正しく、各自その分を守つて、千百年の後までも、決して紊れることは無いが、之れは建國の當初に於て神が開き定め給うた所であるといふにある。

雜

【三三三】 盃

静にも世は治まりて喜びの

盃あげむ時ぞ待たるる

國が安らげく静かに治まつて、世は太平の春を謳ひ、祝ひの盃をあけて喜び樂しむ時の一日も早く來たらむことを待つとは、三十七八年の役に於ける陛下の御咏である、戦ひ勝つて速かに和を講じ、祝賀の宴を張つて、再び平和の世を樂むやうにとの御希望。

【三三四】 四海清

沖の浪寄り來る舟もとしどしに

數そふ世こそ樂しかりけれ

沖の浪の岸べに絶えず寄り來るやうに、諸外國から我が國へ集ひ來る舟の年々歳々に、數増して行く世こそは、實に樂しいとの意▲諸國との交通漸く盛に、通商貿易等の發達は、自然に各國船舶の去來繁く、商工業の進歩、國富の増進、國力の發展は、總てこゝに基するのである、四面海を以てめぐらす島帝國は、諸國との往來唯に船舶の便に依るのみで、諸國の船舶が益々多く我國の各港に寄せ來るのは、眞に喜ぶ可きである。

【三三四】 四海兄弟

四方の海皆同胞と思ふ世に

など浪風の立ちさわぐらむ

全世界は悉く兄弟であると思つて居るのに、何故戦争などして、忌はし

雜



明治大帝御製謹註

二二二

き騒ぎをせねばならぬのかとの意▲四方の海は全世界、全世界の廣きを海にたとへたから、戦争などすることを浪風の立さはぐと仰せられたのである、明治三十七八年の役に於ける御詠と承はるが、此の御詠に依るも陛下が如何に平和を愛して居給ふたかい充分にわかるであらう、英人アーサー、ロイド氏は三十七年十二月これ等の御製を英譯して、各國の皇室及び主権者に贈つたが、何れも深く心を動されたといふことであつた、就中時の米國大統領ルーズベルト氏の如きは、感激最も甚だしかつたやうに傳へられた。

【三三五】 學校

今はとて學の道に怠るな

ゆるしのふみを得たる童へ



今はとては今はもう充分であると安心する事、ゆるしのふみは卒業證書童へは小供等▼一首の意は、多年の勉學その功を奏して、今日目出度く卒業證書を得た小供等よ、これでもう充分であると思つて、今後の勉學を怠るやうの事があつてはならぬぞよと訓戒したまふたのである▲學問の道は何處まで進んで行つても極まる所はない、卒業證書は一の階段であつて、決して學問の終ではないから、これを得たからといつて、それ限りで學問を放擲するが如きは、愚の極である、斯くの如き徒輩は、到底大人物となることは出来ない。

【三三六】 庭訓

たらちねの庭の教は狭けれど

ひろき世に立つ基とはなれ

雜

二二三



た。ちねは足乳ね、母の枕詞であつたのが轉じて親の枕詞となり、更に再轉して親といふことを意味するやうになつた、庭の教は家庭教育である。▼親が家庭に於て日々教へる所のことは、學校に於て教へる所のものに比べると、甚だ狭い日常の些事に過ぎないけれ共、其の教たるや實に人の人たる根本の教であるから、後日生長して社會に立つた時には、これが活動の基礎となるのである、故に事小なるが如くにして決して小ならず、最も大切なものであるから、これを忽にせず、學校教育と相伴うて行かねばならぬとの意。

【三三七】 手 習

進む可き筆さきしるし幼子が

手ならふ文字は拙けれども



幼い子供たちの習字の稽古をして居る處を見ると、その習ふ文字は如何にも拙いけれども、これはまだ年が幼いのであるから政方が無いが頼母しいことには、將來進歩すべき筆さきが著しく見えることであるとの意。

【三三八】 同

竹馬に心の乗りててならひに

おこたりし日を今思ふかな

竹馬に乗つて遊ぶことに心を奪はれて、幼き時習字の稽古を怠つたが、今になつて考へると實に口惜しい、残念であるとの意で御幼少の頃の御事を思ひ出でさせられての御製である▲人は少年の時勵ますして、成年の後これを後悔する者が少くない、この御製は斯かる人々に善き教訓と



なるであらう、唯に文字習ふことのみで無い、幼少の頃は總ての學問技藝を修得すべき基礎を作る時であるから、大に勉め勵むことが必要である。

【三三九】 同

幼子が習へば習ふほど見えて

清くなりゆく水莖のあと

幼子の習字は稽古をすればする程に、進歩の跡が著しく見えて、水莖のあとも次第に清くなつて行くとの意▲水莖とは筆蹟である、清くなりゆくとは、筆蹟を水莖といふ故に、水に縁ある清しといふ詞を用ゐさせたまうたのであつて美しい或は立派と云ふ事。



【四四〇】 草 木

花になり實になる見れば草も木も

なべて務はある世なりけり

野邊のほとりに生ひ伸びて居る名もなき草や木は、何の爲めに生ひ出で居るのか、うち見た處一向にわからないやうではあるが、春來れば花を開き、秋至れば實を結ぶ所を見ると、それ等の草木でも、總て一定の務めがある▲されば貴き人間と生れて來た者には、草木に増したる大切の務めがあるは言ふまでもない、然るに若し人と生れながら人たるの務めを盡さないでは、草木にも劣ることであるから、大に自ら省みて各々その本分を盡くさねばならぬ。

雜

【三四一】草

いふせしと思ふ中にも選びなば

薬とならむ草もこそあれ

莖伸び葉が生ひ茂つて、むさくるしく、うるさいと思はれるやうな雑草の中にも、よく探し求めたならば、薬となるやうな有益な草もあることであらうとの意▲これは單に文字の上のみの解釋であるが、含まれて居る意味をいへば、自分の心には好まない嫌だと思ふやうな人の中にも、探して見れば大に有力の材を抱いて居る人物もあると云ふことである、されば唯表面のみの好き嫌ひで、人を區別するやうな事があつてはならぬと、野に遺賢なからしめむとの大御こゝろを、この御製に依つて示したまう



たものと、察し奉つる。

【三四二】蝸牛

さゝやかに見ゆる家居も蝸牛

獨り住むには事足りぬ可し

蝸牛は何處へ行くにも家一つ、脊に負ふ殻は極めてさゝやかなものではないあるけれども、たゞ其の身一つを容れることが出来れば、それでよいのであるから、さゝやかに見ゆるこの家でも、決して不足することは無からう、人もまた然り、雨露さへ防ぐことが出来れば、それで澤山、身分を越えた過望を起すことなく、各自その分に應じて満足することを知らが大切であるとの意(さゝやかは狭少な事を云ふ)。

雜

【三四三】 蘆間船

取る棹のこゝろ長くぞ漕ぎ寄せむ

蘆間の小舟さはりありとも

蘆間を漕ぐ小舟は、蘆に妨げられて、なか／＼に漕ぎにくいものであるが、取る水棹の長いやうに、心を長く持つて、徐々に漕ぎ寄せやうとは、明治二十七八年の役後、遼東還附のことありし際、咏みいでさせ給うた御製と承はる、總て我が志をうち立て、進みゆく前途には、多くの障害が横はつて居るもの、これ等の障碍に心激して短慮の事をする場合には、折角の志望も果たされずに終ることが往々であるから、一時の苦痛や困難やまた屈辱などは、之れを忍んで徐かに百年の大計を劃するが必要であるとの意。

あるとの意。

【三四四】 薄暮眺望

家なしと思ふ方にも燈火の

影みえ初めて日は暮れにけり

野の夕まぐれ、靄淡くたなびいて、四邊は一色の中に包まれて仕舞つた、木も見えず、岡も見えぬ彼方に家あるべしとは思はざりしに、ちら／＼と見え初むる燈火の影、あゝ日はいよ／＼暮れ果てた家など迎も有りはずまいと思つて居た方角から、夕方になつて計すも燈火が輝き出てたのである。

【二四五】夕眺望

夕やけの空のけしきぞ美はしき

みどり果てなき松原の上に

みどりの色限りなくうち續いて居る松原の彼方、夕日今將に没せんとし  
て、西の空を染め、雲は燃ゆる紅の如く、下には續くみどりの松原▲松  
のみどりは夕やけの雲に映えて、その美しさはたとへむに物なきばかり  
である、あはれ、華かにうるはしき夕の眺望。

【二四六】月前言志

わがこゝろ至らぬ限のなくもがな

この世を照らす月の如くに

月の光は不偏である、天地間すべてのものを照らして些の不公平もない、  
一視同仁、かくの如くわが心も、天下萬民に對して、決して及はぬこと  
の無いやうに、如何に深き山の奥、遠き浦の末までも、限なく行き届く  
やうにとの忝なき大御心の程▲拜し奉つるさへ涙こぼるゝやうである、  
限は窪み入りたる間の義、なくもがなは無いやうにとの御願望。

【二四七】田家夕

あげまきも牛ひきつれて歸り來ぬ

ゆふげの煙見ゆるわが家に

あげまきは總角、子供の頭髮の結び方、又この頭髮に結ふ年頃の小供を  
いふ▼野は今や夕月西に落ちて淡暗く、幼き子たちは、おのゝ牛を引

雜



明治大帝御製謹註

二三四

つれて、我が家を指して歸つて来た、家には夕飯たく煙がのどかに立のぼつて居る▲村里の夕べの景色、如何にも平和である。

【三四八】 旅宿雨

草まくら旅の宿につきてのち

うれしき雨の降り出でにけり

草まくらは旅に冠らせる枕詞▼一日の旅を終へて旅宿に着き、勞れを癒さうとする時しも、雨の降り出でたるうれしさよ、雨は静かに又のどかに降る▲雨を見、雨を聞きながら、旅館の一室に心もゆるやかに、体も安らかに、その心地よさは筆や言葉に盡し得ない。



【三四九】 旅泊重夜

波風のあらしといひて今宵また

おなじ港にうき寝をぞする

海上は波風が荒いといふので、船出せず、今宵もまたおなじ港に泊ることであるとの意▲うき寝は波に浮べる船の中に寝ること、浮寝を意味するが、こゝでは憂寐、即ちわびしい旋寝をするといふ意味をも含めてある。

【三五〇】 太平戒心

世はやすく治まりぬとて人みな

ゆるふ心ぞあだになるべき

雜

二三五



世は泰平無事に治まつて、吹く風も梢を鳴さぬやうな平和な時になつたと  
思つて、安心して居ると、油斷大敵、その安心は忽ち身に仇となつて、  
戦亂の世となり、日夜不安の思ひするばかりでなく、幾万の人の命や幾  
億の富を捨てねばならぬやうな、實に悲惨極まる時代が現出するかも知  
れない、されば治に居て亂を忘れずとの古人の訓言を充分心に守つて、  
戦争など更にない無事な時でも、怠らず警戒することが肝要である。

【三五二】 心静延壽

むらきもの心をひろく養はば

長きよはひも保たざらめや

凡そ長壽を保つの法は、心を廣く寛かに持つて、何事にもこせつかず、



悠々として春の海の如くするにあり、左様にしたならば、長壽を保たれ  
ぬことがあらうか、必ず保たれるとの意である▲むらきものは心に冠ら  
せた枕詞。

【三五三】 車

覆へることもこそあれ小車の

進むにのみは任せざらなむ

如何に快走する車でも、時とすると覆へることもある世の習ひである、  
されば、唯に車の走るに任せて、少しも考慮する所なく、無暗に進みゆ  
くやうの事をせず、常に心を充分警戒して、轉覆する如き恐れのないや  
うにするのが肝要である▲人稍もすれば、唯己の心の趣くに任せ、前後

の分別もなく、事をなして思はぬ失敗に多太の困難を招き、悲境に陥ることが少くない、この御製はこれ等に對する御訓戒である。

【二五三】 植物苑

わが苑に繁りあひけり外國の

草木の苗もおほし立つれば

外國から渡つて來た草木も、栽培その法宜きを得て、充分の注意を怠らない時には、氣候風土の異つて居る我が國の園生の中にも、盛に成長して繁り合ふやうになつたとの意▲げにや外國の花菴幾百種、我が國に移し植えられて、已に年久しく、何れも美しく生ひ茂りつゝある、これを人事に及して考ふるも、古來外國人の我が國に渡來して、移住歸化する者



傳へ來て國の寶となりけり

【二五四】 寶

聖の御代のみことのりぶみ

皇祖皇宗のその御代々々に出たさせたまうに御勅の書は、代々傳へ來たつて、今日に及び、國の寶となつたとの意▲聖の御代は聖天子の治められた時代をいふ、我が陛下には常に皇祖皇宗の御遺訓を重んぜさせられ、これに従つて一國を治むる政治の御方針を定めさせて居給うたからして、この御遺訓は、二なき御寶として御尊重あらせられたのである。

【二五五】同

葦原の國富まさむと思ふにも

あをひと草ぞ寶なりける

葦原の國は我日本國、上古未開の時代に葦が生茂つて居たといふ所から此の名が出たのである、あをひと草は人民のこと、その數多きこと生ひ茂れる青草の如き意味より人民を草にたとへて青人草といふのである▼我が日本國の富を増さうと思ふにつけても、まづ第一に貴いものは六千萬の國民である、國民こそは實に國の寶である、深く人民を頼みたまひ、慈母の赤子を愛するが如くに思し召させ給ふた御意▲如何はかり畏れ多いことではないか。



【二五六】民

千萬の民よ心をあはせつ、

國に力を盡せとぞ思ふ

子の如くに愛し、寶として尊び、力としてたよる六千萬の國民よ、汝等一同心を合はせ、思ひを一つにして、國家の爲めに盡せよとの意▲我が陛下に於かせられては、國家の事、一として國民の發奮努力に待たれるさるなく、國運の發展や文明進歩の効も悉く國民に歸したまうて、御自分の御功績に就いては、一言も仰せられない、斯かる御謙徳の陛下が、斯く宜ふ上からは、益々國家の爲めに盡すのが吾れ等の務めであると思ふ。



【二五七】 同

國のためいよく、盡せ千萬の

民の心を一つにはして

此の御製は、前のと唯上の句下の句の入れ更はつて居るばかりで、歌のころは同一であるから別に奉釋の必要はないと思ふ、依つて之れを略す。

【二五八】 教 育

いさをある人を教の親にして

おほし立てなむ大和撫子

教の親とは教師である、生の親はその子を養ひ育てるが、教の親は人の子を教へ育てる、大和撫子は我が國に固有の撫子を云ふのである、花も美麗で頗る愛らしく、宇も撫子と書くので、愛らしき人の子を呼ぶに此の撫子と云ふ稱をもちゐるのは、古來の慣例である ▼ 國家に勳功のある人を教師として、多くの少年子弟を教育させ度いものであるとの意 ▲ 漏れ承はる所に依れば、此の御詠は故乃木大將を學習院々長に御親任あらせられた前後に物せられたものであるといふ、乃木大將は世人の知る如く、明治三十七八年の役に、愛する二子を旅順に戦死せしめ、更に哀愁の色を示めさないのみならず、愚子よく國家のために盡し得たるは、最も喜ぶ所であると微笑み、自身も亦赤誠を以て赫々たる武勳を立てた忠勇比類なき英雄である、乃木大將は深く陛下の御信任に感激し、此の御製を或る人に拜寫させ、日常念頭に掲げて、此の御意に添ひ奉つるやう、粉骨碎身して、學習院々長の職を奉じ、青年子弟教育の爲めに盡

雜



しつゝあつたが、不幸にして陛下の崩御に會ひ、慟哭哀愁一方ならず、且心に世のさまを憤るの念あり、陛下御大葬の夜、靈柩車の宮城を出御遊はさるゝ時刻を合圖に、自及して陛下の御後を慕ひ奉つられたる誠忠無二の生涯は、眞に世の龜鑑である、陛下が斯くの如き人物を御信任遊はしたのも、乃木大將が深く陛下の御信任に感激したのも、共に歴史上の美談として、永久にいひ傳へられることであらう。

【二五九】 同

正しくも生ひ茂らせよ教草

をとこ女の道をわかちて

男女の區別を明かにして、正しい教育を發達普及せしめよとの意である▲



教草は教の材料となるものを意味すれど、こゝでは單に教育といふ義に解すればよい、古來男子は男子、女子は女子として、その間に嚴然たる區別があつて、各々その分に從ひ、互に相犯すことなきを我が東洋の禮儀習慣として居る、世の進むにつれて種々なる變遷は免れないけれ共、此の男女の別は決して紊すことなきやう、教育を施してゆけよとの聖慮であらう。

【二六〇】 同

ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ

をしへ難きは人の道なり

人の人たる道を教へるほど、教へ難いものは無い、正當なる方針を誤ま



る時には、飛んでもない邪路に踏み外らし、取りかくしの出来ないうやうなことが屢々である、ともすればひよつとすると若しくは油断をすると、世に困難の事業はその數少くはなからうけれ共、教育事業の如きは、實に難中の難事である、之れに従事する者は大に考へなくてはならぬ事である。

【三六一】 同

進みたる世に生れたるうなるにも

むしかのことを先づ教へなむ

うなるは垂髪と書く、昔は童男童女の髪を項に垂らして居たので、此の名稱を生じたのである、幼い子どもを指していふのであるから、今日で



は小學の生徒に當る、さて日進月歩の今の時代に於ては、此の時代に生れた子どもを教育するに、素より時代相應の教育を施すこと無論であるが、何はさて措き、まづ第一に教へねはならぬのは、我が國の基礎たる昔の事であるとの意▲これ實に國民教育の大方針を示させ給うたものである、我が國体の由て來れる處、建國の大精神を充分に了解させる爲めには、是非とも昔の事を子等の頭腦に明瞭に教へなくてはならぬ、此の知識を缺く時は、第二の國民は或は方途を誤るかも知れない。

【三六二】 時計

時計る器は前にありながら

たゆみ勝ちなり人の心は



一秒過くれは一秒、一分過れば一分、時計の針は進んで少しも待たない、これを目の前に置いて居れば、心もおのづから勵まされて、大に勉強し、さうなものであるが、事實は全くこれに反対で、兎角に怠りかちである。斯くては昔の人も言つたやうに、少年老い易く學成り難しで、油断して時間を空費すれば、生涯に何の成ともなくして終るであらう、戒む可きである。

【二六三】 同

時はかる器の針のともすれば

狂ひやすきは人の世の中

時計の針といふものは、最も精確に時間を示めす可き筈のものであるに、



兎角すると狂つて時を違へることがあるものであるが、人の世の中もまたこれと同じく、正しき路を外づれて、悪しき方へと迷ひ易いものである▲

【二六四】 御題知らず

くもりなき神のこゝろはとことばに

八咫の鏡にうつりますらむ

一點の曇りをも帯ひて居ない神の心は、此の八咫の鏡の表に、永久に、影をうつされて居ることであらうとの意▲八咫の神鏡に對したまうて、其の明光曇りなき神々しさに、心うたれたまうた餘り、咏み出てさせられたものであらう。と拜し奉る

【二六五】 同

自に見えぬ神にむかひて愧ぢさるは

人の心のまことなりけり

神の姿は我れ等の目を以て見ることは出来ないけれども、天地の間に在したまうて、人間の善悪正邪を見そなはせ給ふ、人は唯その心の中に至誠さへあれば、此の目に見えぬ神の前に立つても、決して何等の愧づる所は無い、實に願はしきは心のまことである▲これある時、我れ等は常に楽しく、心地よく、天地に俯仰して、些の疚しい所あるを知らず、かゝる境にある者ほご、世に幸多いことは無からうと思ふ。

【二六六】 同

いその上ふることふみは敷島の

やまとことばの葉なりけり

いその上は「古」に冠する枕詞、ふることふみは古事記をいふ、これは元明帝の和銅四年、博士大朝臣安磨呂が選進した日本に於ける最も古い歴史であつて、當時の口語を以て記述されて居る、此の御詠は古事記を咏ませられたもので、此の古事記といふ書物は、我が日本の國に於ける國語の範であるとの意。

【二六七】 同



むらきもの心の限り盡してむ

わが思ふこと成るも成らずも

むらきものは心に冠せる枕詞、一度心に斯くと思ひ立つた上からは、其の事の成ると成らぬとは別として、この心の限りを盡さうとの意▲凡そ世の中のことは、成功しさうにあつても、しないことが屢々である、其の成ると成らぬとは、一に天の定むる所であつて、人の豫め知り得べき所でない、唯その成否を度外にして、自己最善の努力をなす所に人間の人間たる価値は存するのである、蓋し斯くの如きは、堅固なる意志、絶大なる精力の人にして始めて成し得る所、凡庸なる薄志弱行の徒には、到底望み得る所ではない、此の御製は何如に陛下が勇敢剛毅にわたらせられたかを、充分に現はされて居る貴い御詠であると思ふ。



【三六八】同

臥す龍の岡のしら雪ふみわけて

草のいほりを訪ふ人は誰れ

臥す龍とは、その昔支那に諸葛孔明といふ人があつた、其人を指したのである、彼れは襄陽に陰伏して閑雲野鶴を友として居た、草のいほりとは彼れの閑居をいふ、訪ふ人は劉備即ち後に至つて蜀漢の照烈皇帝と諡された名將軍である▼此の御製は草慮三顧を咏せられたもので、降り積る白雪ふみわけて、諸葛孔明が世を遁れて閑日月を送つて居る草のいほりを訪づね行く人は誰れであらうと▲劉備が野に隠れたる賢良の臣を採用せん爲めに、自ら禮を厚うして、孔明を訪ねて行つたのを御賞讃遊ばされた御

雜

咏である。

【二六九】 同

まうで来る人の心を洗ひけり

御手洗川の水のしらなみ

御手洗川は京都賀茂社の前を流れて居る清流である、賀茂社に來り詣づる人は、その前を流るゝ御手洗川の清き水に、心の塵を洗ひ去られる、更に神前に立てば、莊嚴の神威人を壓して自から敬處の念を禁じ得ない、水の清いのと神威の貴いのに、人の心も清められるとの意。

【二七〇】 同

波風の静かなる日も船人は

楫に心をゆるざらなむ

海の上は、風も吹かず、波も立たず、至極静穏であつても、何時天氣急變して、風吹き出で、浪たち騒ぐやうになるかも知れないから、船頭たる者は、平常この覺悟を以て、静かに穩かな日と雖も油斷することなく、楫握る心をひき締めて、注意警戒することを怠たらないであらうとの意 ▲國家に事なき日も、治に居て亂を忘れぬ心を以て、油斷ある可からずとの大御心を海上の船に例へて諭されたものであらう。と拜し奉る。

【二七一】 同

雜



わが心およはぬ國の果てまでも

よる晝神は守りますらむ

如何なる山奥の村里も、海の極みなる濱邊も、凡そ知し召す限りの天か下には、御こゝろの至らぬ所もない筈であるが、御謙讓の御心に満ちさせ給ふ陛下には、なほ國の端々には、朕が心の行き届かぬ所もあらうと仰せられ、その端々の朕が思ひの行き届かない所には、神が夜も晝も御守を垂れて下さるであらうとの意▲御自分の御威徳は宣はせられず、ひたすら神明の加護を祈らせ給ふ聖慮のほどは、推し奉るるも忝じけない次第である。

【三七三】同



われとわが心折りく顧みよ

知らずぐも迷ふことあり

迷ひ易いのが人の心である、少しでも油断して居ると、何時の間にか、知らずく邪路に迷ひ入つて居るものであるから、人は誰れも自分で折りく自分の心をかへりみて、決して邪路へ外れぬやうに注意するのが肝要であるとの意。

【三七三】同

若竹の生ひゆく末を思ふ世に

庭の訓をおろそかにすな





若竹は小供のことを仰せられたのである▼凡そ世に誰れとて我が子の生ひ立つて行くその行末を思ひ、幸多かれかしと願はぬものは無からう、されば、我が子の行く末を思ふ程の者は、家庭の教育をおろそかにしてはならぬとの意▲家庭は實に人の性質を養成する所であつて、將來有爲の人物は、その初め家庭に於て充分に教育され、社會活動の基礎をつくるものであるから、自己の子弟をして有爲の人物と成さうとするには、是非家庭教育に意を用ゐねばならぬのである。

【二七四】同

ものまなぶ道に立つ子よ怠に

まされる仇はなしと知らなむ



物。學ぶとは總て修業するといふ廣い意味にも取れるが、こゝでは學問の道にと解するが宜からうと思ふ▼學びの道にある小供らよ、學問の邪魔になる怠情ほど學問の仇となるものは無いから、よくこの事を心にわきまへて、決して惰けたり怠つたりするやうの事があつてはならぬぞよと、小供たちを鞭撻したまうた御製である。

【二七五】同

いつくしと愛の餘になでし子の

庭の訓をおろそかにすな

可愛さの餘に、我が子に對して、家庭の教育を粗忽にすなどの意▲いつくしとは美しいこと即ち可愛いことである、なでし子とは子供をいふ、

雜



明治大帝御製謹註

二六〇

世間には、我が子を可愛がり過ぎて、家庭に於ける躬が行き届かぬものが少なくない、これが爲めに子供は却つて成長の後種々の不利益を來すものであるから、可愛ければ可愛だけに、益々家庭に於て嚴格なる充分の教育を怠らぬやう注意しなければならぬ、可愛い子には張をさせといつた古諺もこれを言つたものである。

【二七六】 同

よきを取り悪しきを捨て、外國に

劣らぬ國となすよしもかな

物には總て善惡長短のあるものである▼されば善い處や長所とする所は之れを採り、悪しき所や短所とする所はこれを捨て、以て我が國の文



化を大に發達せしめ、外國に劣らぬ立派な國にし度いものであるとの意  
▲げに我が國は、歐米諸國と交通を開いて以來、彼れの長所を採り、我れの短所を捨て、君民共に奮勵努力の結果、文物制度大に整ひ、今日世界列強の一として歐米諸國と肩を比へて立つことが出来るやうになつたのは、全く此の御製の精神に依つた爲めである、將來なほ此の精神を奉體して、愈々立派な國と成して行くのが我れ等國民の楽しい義務である。

【二七七】 同

さしのほる朝日の如く爽に

もたまほしきは心なりけり

朝東天の雲が破つて、赫々と輝り出つる太陽の光は、眞に雄々しく、崇



明治大帝御製謹註

二六二

高く、之れに對すれば心は自然に伸びくして、快く清々しい、人のこゝろもまた此の朝の太陽の如くに、澄みわたつて清く、さつぱりと持ちたいものであるとの意▲爽にはさつぱりと若くはせい／＼とする意、太陽の朝東の空にさし昇るさまを言つたもので、持たまほしきとは持ち度いと希望。

【三七八】 同

天さかる鄙の果てまで繁らせむ

わが敷島の道おしへぐさ

天さがるとは鄙に冠せる枕詞、敷島の道教草とは教育のことである▼如何なる山の奥海の果ても、國中至らぬなく、教育を普及せたいもの



であるとの意▲今や我が國は山間僻地、如何なる地方と雖も、學校の設けあらざるはなく、教育は眞に普及して居る、これ全く陛下の此の思召が實現されたものであつて、誠に目出度く感謝す可き限である。

【二七九】 懷 舊

折り／＼に思ひそいづる國の爲め

心くだし人のむかしを

國家のために心を砕いて、赤誠を盡して偉勳を樹てた無名な人や有名な人々の在りし昔のことを、何かの折りにつけては、思ひ出すことであるよとの意▲これ陛下が忠良なる臣民の遺功を思ひ出でさせらるゝ大御こゝろを咏じさせ給うたものである、誠に辱なく畏れ多いではないか。

雜

二六三

【三八〇】 夢見故人

慕はしと思ふ心や通ひけむ

むかしの人ぞ夢に見えける

日頃心に慕はしく思つて居たその真心が通つたのであらう、むかしの人を夢に見たとの意である▲むかしの人は故人となつて今は世に存して居ない人で盛徳が人に勝れた人や武勳を世に輝かせた人や學才の秀でた人やその他すべて世の龜鑑たり人の師表たる古今東西の故人を忍はせ給うたのか、又畏れど御先父皇帝御母皇后或は皇祖皇宗の方々を懐しからせ給うたのか、亡き人を夢に見たまうた折に咏みいでさせられたものであらう。

【三八二】 夢

たらちねの親のみ前にありと見し

夢の惜しくも覺めにけるか

たちちねとは親と云ふ宇の枕詞▼親の御前に居たと夢に見て、如何にも楽しく嬉しかったのに、果敢なきは夢路、樂し嬉しと思ふ間もなく、やがて夢は覺めて仕舞つた、誠に惜しいことよとの意▲孝心深うまじませし陛下には、夜の御殿の御夢にも夢みたまうばかり、御父皇帝や御母皇后の上を慕はせられて在まし給うたこと、拜察するも畏れ多い。

【三八三】 思往事

雜

たらちねのみ親の御代に仕へたる

人もおほかた亡くなりけり

た。ら。ち。ね。の。み。親。の。御。代。と。は、父。皇。帝。即。ち。孝。明。天。皇。の。御。代。で。あ。る。▼。そ。の。當。時。よ。り。忠。勤。を。勵。ん。で。仕。へ。奉。つ。た。人。た。ち。も、年。月。を。経。る。ま。ゝ。に、一。人。缺。け。二。人。亡。く。な。つ。て、今。は。も。う。大。方。見。え。ぬ。や。う。に。な。つ。た。と。の。意。▲。父。皇。帝。の。御。代。に。仕。へ。て。居。た。功。臣。を。追。慕。さ。さ。せ。れ。た。大。御。こ。ゝ。ろ。の。程。辱。け。な。く、そ。れ。に。つ。け。て。も。父。皇。帝。を。御。敬。慕。遊。は。さ。れ。た。御。有。様。も。著。る。し。い、大。西。郷。や。大。久。保。卿。や。岩。倉。公。や。三。條。公。や。近。衛。公。や。正。親。町。諸。卿。等。の。相。亞。い。で。薨。せ。ら。れ。た。頃。の。御。咏。で。あ。ら。う。と。察。し。奉。つ。る。

【二八三】 同

たらちねのみ親の御代は白雲の

四十のよそになりけるかな

た。ら。ち。ね。の。み。親。の。御。代。即。ち。父。皇。帝。孝。明。天。皇。の。世。に。在。し。て、天。の。下。知。し。召。し。給。う。て。居。た。御。代。は、考。へ。て。見。れ。ば。早。や。四。十。年。も。昔。に。な。つ。た。よ。と。の。意。▲。大。か。た。明。治。四。十。年。頃。の。御。製。で。あ。ら。う。と。拜。察。せ。ら。れ。る、白。雲。の。は。よ。そ。と。い。ふ。語。に。冠。す。る。枕。詞。

【二八四】 親

むらきもの心つくして報いなむ

おふし立てたる親の恵みに



我が身の今日あるを得るは、これ一に我れを養ひ育て、呉れた親の恵である、親は子を成人させるまでには、幾多の憂き苦勞をするか知れない、その憂き苦勞をも厭はずに我れを育て上げてくれた恩愛の情といふものは決して普通のものではない、これを思ふ時は、誰れも心の有らん限りを盡して、充分にその恩に酬るやうにし度いものであるとの意▲おほしたてつるとは養育し立てること。むらぎもとは有る限りの心と云ふこと。

【二八五】 同

たらちねの親の心を慰めよ

國につとむる暇ある日は

親は誰何事も子の爲めに憂ひ、子のために喜ぶものであるから、日頃心



掛けて親の心を慰めるやうに勉めなくてはならぬが、國家の務めに忙はしい身は、何時も親の側にあるわけには行かない、時には家をも打忘すれて盡さねはならぬけれども、公の務めに暇な折には、心を盡し、思ひを碎いて、親の安心するやう、喜ぶやう、慰さめるやうにせよとの意である。

【二八六】 同

國のため倒れし人を惜むにも

おもふは親のこゝろなりけり

國の爲めに戦場に出で、敵彈の爲めに倒れて死んだ勇敢なる朕が兵士を惜しむにつけても、かゝる善い子を失つた親の身は、如何であらうぞと、

雜



明治大帝御製謹註

二七〇

其深き御心配が表はれ出た御製である▲國に忠なる民は、親に孝なる子であつて忠と孝とは一つである、かゝる子が家に居れば、親は定めて嬉しく頼母しいことであるが、國の爲めとはいへ、亡くなりては如何にも心細く、たより無いことであらうぞと。陛下は深くも戦死者の親の身にも同情させたまうたのである、豈有り難い事ではないか。

【二八七】

同

ひとり立つ身となりし子を幼しと

思ふや親のこゝろなるらむ

獨立して立派な一人前の人間となり、親の世話にもならねば、誰れ人の世話にもなる必要のない程になつても、親のみは、まだ幼い者のやうに心



得て、いろ／＼と子のために心配するものであるが、それが親心といふもので、子に對する慈愛の情深き一般の親の心を御咏み遊ばされたものである、親の心なるらむとは、親の心であらうとの推測語。

【二八八】

同

たらちねのみ親の教あら玉の

年ふるまゝに身にぞ泌みける

親の教訓は、まだ年のゆかない時には、左程にも考へず、或る時はウルサイとさへ思うことがあるけれ共、年を取るに従ひ、漸くその有りがたいことが解つて来て、身に泌み／＼と感せられるやうになるものであるとの意▲あら玉とは毎年毎年來る新らしき年を云ふ、即ち年と云ふ字の

雜

二七一

【三八九】子

たらちねの親の教をまもる子は

まなびの道もまとはさるらむ

家庭にありてよく親の教訓を守り、心を清く持ち、行を正しくして行く程の子供ならば、外に出て、學問の道に就く時に於いても、よく教師に聞き、教師を信じ、自ら勉め勵んで、決して怠惰に陥り惑ふやうなことは無からう、斯くの如き子どもにして始めて立派に勉學の効果を收め、將來世に立つて、充分なる働きをなすことが出来るのであるとの意、まどはざるらむとは惑はないであらうと云ふ事。



【三九〇】同

思ふことうちつけにいふ幼子の

言葉はやがて歌にぞありける

心の中に思つて居ることを、少しも隠さず偽らず、遠慮容赦なく思ひそのまゝを露骨にいふのは、幼子であつて眞に天真爛漫の極致、これやがて天地の至情をうたひ出づる歌である、歌は心の眞をそのまゝにいひ現はしたもので、決して何等の飾りもなく、詐りもない、子どもの心と歌のこととは、その眞なる點に於てよく似て居る、これ即ち此の御製を咏み出でたまうた理由であると考へ奉る。

【三九一】同





思ふこと繕ふこともまだ知らぬ

をさな心のうつくしきかな

幼子の心の天真爛漫なる、如何なる人の前へ出て、更に繕ひ飾ることをせず、我が心に思うて居ることを其のまゝに言ふ、世にこればかり美しく愛らしいものがあるであらうかとの意▲この御製は、皇孫殿下の御参内ある折り、御居間を見まはし給うて、珍器名什の御目にとまるまゝ、これ等の品々を欲がらせ給うた御有様を、そのまゝ、咏み出てさせられたものゝやうに承はつて居るが、貴きも賤しきも、幼き子どもの心は差別なく美はしいものである。

【二九二】 同



思ふこと思ふがまゝにいひ出づる

をさな心やまことなるらむ

心の中に思つて居ることを、思つて居るがまゝに、少しも秘すことなく、そのまゝ、言ひ出づる幼子の心こそは、これ人の心の真であらとの意▲世には虚偽が多い、世の中の人々は心に思つて居ることゝ言葉に出して言ふことや行ひに現はしてすることゝは反對の事が少くない、此んな人は偽善の動物といつてよい程であるが、まだ世の汚れに染まぬ幼い子どもだけは、何等の虚偽もなく、偽善もない、生れながらの正しい眞の心を持つて居るものである。

【二九三】 兄弟



千代よばふ聲ぞ賑ふ山松の

つらなる枝のひろき園生は

山松の枝うち連つて居る廣い園生には、千代呼ばふ鶴の聲が賑はしいことであらうとの意▲これは兄弟の睦じく相互に扶け合ひ、寄り合つて、力を一つにして居る人々の有様は、鶴の巢を組む大松の枝と枝とを打ち交はし、その上に目出度き聲を聞くやうに、一家一族が繁昌して、楽しく賑はしいことであらうといふことを御形容遊されたものと拜し奉る。千代よばふとは千年も萬年も呼び交はすこと。

【二九四】心

敷島の大和心の雄々しさは

事ある時ぞあらはれにける

敷島のは太和に冠せる枕詞 敷島の大和心とは我が日本民族の精華たる日本魂をいふ▼その雄々しく勇敢なるさまは、平素は隠れて見えないけれども、一旦平和破れ、國家の存亡興廢に關はる危急の時には、直ちにその姿に現はれて來るとの意▲天下太平の世には、花に雪に風雅の思ひを寄せて楽しむ武士も、いざといへば、劍太刀を取つて立つ勇しさ、この例證は遠く古の歴史を探らずとも、近くは明治二十七八年及び三十七八年の役に於て、遺憾なく發揮されて居る日本魂の本領は、今や世界各國の認めて讚美する所となつて居る。

【二九五】同

雜

事なしとゆるふ心はなかくに

仇あるよりも危かりけり

今は大平無事に治つた世であると思つて、心をゆるめ、氣をゆるめて居ると、其れが却つて眼の前に仇が押し寄せて來て居る時よりも危いものであるとの意 ▲凡そ何時の世、如何なる時代に於いても、騷亂の起るは、決して起るの日に起るのではなくして、その由つて來る所は遠く平和の時代靜穩の世にある、無事の時に油斷して居た結果が戰亂として現はれるのであるから、油斷こそ總べてのものに勝つた大敵である、故に昔の人も治に居て亂を忘れずと言つた、此の御製もまたこの大御ころを以て、我れ等國民を戒めたまふたもので、單り戰爭のみに限らぬ事である。萬事が其通りである。

【二九六】 同

思ふこと任せずとても人心

平にこそあらま欲しけれ

思ふに任せぬ事が多いのは世の中である、人は誰れも自分の思ふ通りにならぬことがあると、其れが爲めに、種々と不平な心を動すものであるが、かくては煩悶となり、懊惱となつて、世の平和を害し、歡樂を失ふものであるから、如何なる困難苦痛に出會つても、迫害が襲うて來ても、心だけは平に持つて、何事にも動されず迷はされぬやうにあり度いものであるとの意。

【二九七】 同

ともすればかき濁しけり山水の

澄ませば澄ます人のこゝろを

人のこゝろは兎角するとカキ濁るものである、山水の如くに、澄ましさへすれば澄まして置くことの出来るものであるとの意▲清き心をカキ濁すものは、さまざまなる世の物慾である、名譽のためや、黄金の爲めや、逸樂のために、人は其の心を邪にし、正しき道を外づれて罪惡に陥ることがある、これ實に戒むべきことでは無いか、山水の澄んで清きが如く、人の心も亦澄んで清らかにある時ほど、心地よく嬉しいものは無い。

【二九八】 賤

己が身を修むる道はまなばなむ

賤がなりはひ暇なくとも

日毎の生活の道に、身も心も忙はしくて、暇とはあるまいが、併し、忙はしいからとて、餘事は措いても、己が身を修むる道だけは、怠らぬやうに學べよ、これをなほざりにしてはならないとの意▲賤民の其の日の生業に追はれて、それが爲め人の人として修む可き道を怠るやうのことがあつてはと、憂ひさせたまうての御戒訓と拜しまつる、賤がなりはひとは賤民の業務と云ふこと。

【二九九】 藥

いかならむ薬すゝめて國のため

痛手負ひたる身を救ふらむ

國家のため、戦場に出て、敵軍と奮戦し、劍に傷けられ、矢丸に打たれて、重い傷を負うた軍人たちは、如何なる薬を與へて、その身を救ひ痛手を癒してやることであらうとの意▲戦時出征の負傷者を思ひやらせ給ひ、その苦しみに深き御同情を寄せさせられての御製である、此の大御ことろのひそみあり給へばこそ、國民は君の爲め、國の爲めに身命を抛つことを少しも厭はぬのみか、喜んで死地に猛進するのである。

【三〇〇】同

心ある人のいさめの言の葉は

やまひ無き身の薬なりけり

心に眞實ある他人が、わが身のためを思うつて、短處缺點を諫めて呉れる其の言葉こそは、病のない元氣な身にとつての薬であるとの意▲これは陛下が諫臣を嘉したまうた大御ことろの御製とも拜しられる、實に古今世界の英主と仰かるゝほどの人々も、其臣下の忠言に耳をかたむけず過まつた悪かつたと氣附いた時に、早速改めて臣下の言に従ふほどの大度の英主は尠かつたが陛下には常に寛大なる海の如き御度量を以て忠臣の諫めを身の良薬と貴く思ひ召されたのである、宇内各國皆仰いて陛下を世界に比ひなき聖主大帝と讃めたゝへるのも決して理由のないことではないのである。

【三〇一】同

雜

隔なくかくる恵みの露こそは

青人草のくすりなりけれ

上下貴賤の區別なく、一様に恵みを與へるのが、天下の萬民に取つては、  
藥となるであらうとの意 ▲青人草とは人民が草木の如く數多くある故に云  
ふ詞、人民を草にたとへさせられたから恵みを草に縁ある露にいひ通は  
せ給うたのである、上に立たれ、天子としては、下人民に對して一視同  
仁、わけ隔なく御慈愛を垂れたまうことが最も必要であるとの思召から、  
かくは咏み出てさせたまうたものであらうと、そゝろ辱なく感せられる。

【三〇二】 行

易くして爲し得がたきは世の中の

人の人たる行にして

人の人たる行といへば、何でもないやうに聞えるけれども、これを實際  
に行う日には、實にむづかしい、言ふに易くして行ふに難きものは人の  
人たる行であるとの意 ▲これが口で言へるやうに譯もなく實行の出来る  
ものなら、世の中には左程道に外づれたことをする人は無い筈であるけ  
れども、實行が出来ないから、口のさきでは體裁の善いことを言つて置  
きながら、行の之れに反する人が多いので畏多くも 陛下は嘆き給ふて  
此御製に表はれて居る。

【三〇三】 同

世の中の人の司となる人の

身の行よ正しからなむ

凡そ世の中の人の司即ち官公吏を始め、苟くも人々の上に立つ可きほどの者は、身の行を正しくし度いものであるとの意▲人は貴賤貧富の區別なく、誰れとて行を正しくするは當然のことながら、わけて官公吏始め人の上に立つ人といへば、世に手本となる可き筈のものであるから、殊更にその必要があるのである、上を見習うは一般の風で、若し上に立つ人々が正しくない時には、やがて此の悪風が下々に感染するから、人の司となる人は其の責任の重大なることを自覺して、此の聖訓に添ひ奉つるの心掛が大切である。人の司とは人の上役の事。

【三〇四】 同

よしあしを人の上には言ひながら

身をかへりみる人なかりけり



他人の身の上のことは、様々に是非善悪を批評しながら、自分の身の上で就いては、一向に顧みないのが普通の人の状態であると嘆かれた御製である▲誰れでも我が身の短所缺點は氣が附かないで、他人の短所缺點のみが目に入る、若し眞に自分の短所缺點に氣が附けば、他人のことなどを是非するやうのことは出来ない筈である、平素によく自身を顧みて、自己の言行に注意して居る人は、決して他人のことを兎や角と批評はせぬ、他人のことを悪しさまに言ひ罵りなごする人は、大抵は缺點多き、行の正しからぬ人格の卑い者である、斯くの如きは最も戒心す可きこと、と思ふ。

【三〇五】 老人

老の波かつぐにつけて思ふらむ

浮きつ沈みつ渡り來し世を

うち寄する老の波を一年また一年と擔ぐにつけても、過ぎ去つた時代の浮つ沈みつした有様が思ひ出だされるであらうとの意▲年齢の加はるのを波のうち寄せるのに譬へ、其身の或る時は富み或る時は貧しく、或る時は榮えまた或る時は衰へて、種々に移り變つて來た生涯の經歷を、波のまに／＼浮き沈みつと仰せられたのである、實に年老ぬれば、壯年時代のことが思ひ出されて、何かにつけても、感情を動かすことの多いものである、老の波かつぐとは年を擔ふ事。

【三〇六】 同

杖つきて道ゆくまでに老し身も

むかしたづぬる葉ごぞなる



杖に頼らねば道を行くことの出來ないやうな老人でも、昔のこといもを問ひ糺す道しるべとなるから、決して無用の者では無い、世の中の人には兎角に老人を輕蔑して最早世に益なきものとして、邪魔者扱ひにする人さへあるが、これは實に大なる心得違、老人は身體も衰へて、若い人々のやうな元氣はないけれ共、長い間に經て來た種々様々の世相經驗談は、世を益し、若い人々の訓となり戒となることが少くない、決して粗末に取扱つてはならぬとの大御心が此御製である。

【三〇七】 同

つく杖にすがるともよし老人の

千とせの阪を越えよごぞ思ふ



杖はつくものであるからつく杖といふ、單に杖といふに差異なし、千とせの阪を越えるとは千年の長壽を保つことである▼人は年を重ねると次第に身體が衰へて、立ち居も自由ならず、道を行くにも杖にすがらねば歩けないやうになるが、其れでも善いから長く此の世に在つて、千年の齡を迎へるまで、壽命を保つやうにし度いと、老人に御同情を寄せられた御製である▲人此の世に生れ來たからには、一日でも長く永へて居るのが幸福であるとの思召からであらう。

【三〇八】 田家翁

子らは皆いくさの場に出ではてし

おきなやひこり山田守るらむ



年若い丈夫な子ども等は皆戦争に出て仕舞つて、山里の農家には老人ばかりが居て田畑が荒れぬ様に能く田畑の守をして居ることであらうとの意▲頃は明治三十七年九月廿五日、我が國は露國と兵火相交へて、國民中の壯年者は、豫備後備の差別なく、多く滿韓の野に出征して居た時の御製であつたと漏れ承はるが、田舎の村々は漸く農事多忙を加へむとする際、血氣壯な年若い者などは、残りなく召集されて、嘸困つて居ることであらうと、深く老人や婦女たちの身の上を愍れみたまうた、その大御こゝろのほどを仰ぎ奉つると、實に畏れ多く忝ない感じがする。

【三〇九】 折にふれての御製

いにしへの書みるたびに思ふかな

おのが治むる國は如何にと





古書を讀んで、ありし昔の治亂興亡、榮枯盛衰の跡を見るにつけても、まづ思ひ浮ばるゝ點は今朕が治めて居る國の状態は如何であらうとの御意である▲古の聖王の御代の泰平に治まつた時と今とを比較して、劣つて居るやうなことは無いか何うかと、御政治のありさまを顧み遊ばして、御讀書の折り／＼にも、さまざまに聖慮を惱ましたまうた事は、承はるだに畏れ多い次第である、斯くあり給ひたればこそ、明治の御代は文化燦然、其他物質的の進歩も古今に比類なき開明の時代として、誇るに足ることが出来るのである。

【三二〇】同

國民の一つこゝろに仕ふるも

みおやの神のみめぐみにして



總ての國民が心を一つにして、國家の爲め、皇室の爲め、忠勤を勵むのは、これ皆皇祖皇宗の御高惠の然らしむる所であるとの意▲みおやの神とは國祖天照皇大神は勿論神武天皇始め歴代の帝を仰せられたものである、皇祖皇宗の御遺徳を慕はせたまふ大御こゝろを咏み出でさせられた御製である。此御製を拜し奉るにつけても吾等國民は益々國祖崇拜の念を厚ふせねばならぬのである。

【三一】同

千早ふる神の心になふらむ

わが國民のつくすまことは

千早ふるとは神に冠せる枕詞、わが國民が至誠を盡して國に仕ふる状は、

雜



神の心に違はず神も見そなはして御嘉納あらせられることであらうとの意 ▲六千萬の國民が唯一途に國家を思うて、營々努力、以て國富を増し、國威を輝かさむとするに餘念なく、聖慮に添ひ奉つらむとする民の誠を、陛下御自身のみ御満足とは爲し給はずして、神のこゝろにまで叶ふであらうと仰せられたのである、實に辱ない極みではないか。

【三三三】同

鍛ひたる劍のひかりいちじるく

世にかゝやかせわが軍ひと

朕が勇敢なる帝國の軍人等よ、汝等が日頃から絶えず鍛ひに鍛うて、百練千磨の功を経て来て居る劍のひかりを、世に輝かし、その武勳を以て



帝國の威風を世界萬國に示せよとの意 ▲我が帝國の軍人は、忠勇無比、常に武を鍊り、劍を磨いて、國家危急の場合に備へ、外國をして容易に隙を窺ふやうな機會を見付けさせない、これ 陛下の大御こゝろに因るものなれば、將來愈々この大御こゝろを奉體して、國威國光を世界に輝かすことに努力せねばならぬ。いちじるくとは著しくと云ふ事。

【三三三】同

千早ふる神ぞしるらむ民のため

世を安かれと思ふこゝろは

六千萬國民のために、國富み兵強く、禮儀行はれ社會平和に、天下を擧げて無事太平なれと祈るわが心を、神は必ず知つて下さつて、これに應



へ給うであらうとの意▲千早ふるとは神に冠らせる枕詞である、神の感應を信じたまうほどに天下萬民の幸福を祈らせらるゝ陛下の御愛心は、真にかしこいともかしこい次第ではないか。

【三二四】 同

山を抜く人の力もしき島の

やまと心ぞもとるなる可き

泰然不動の山をも打ち抜くやうな人の力も、その由つて来る所をたづねて見れば、必ずや我が國粹たる敷島の大和こゝろが基礎をなして居るのであるとの意▲敷島のやまと心は實に我が國民精神の精華で忠君愛國の心である、この大精神は古來我が國民の悉くを司配して、何ことにもあ



れ、事の起る場合には、忽ちに現はれて来る、山を抜く力も唯偶然に出で来るにあらずして、このやまと心から由つて来ることは、さもあるべき筈と考へられる。

【三二五】 同

もろともに扶けあひつゝ國民の

むつびあふ世ぞ樂しかりける

天下の萬民が互に心を合はせ思ひを一つにして、扶けつ扶けられつ、仲よく睦び合つて呉れるのが一番樂しく嬉しいことであるとして仰せられた御製▲平和の基は一國の民が互に睦しく、心を一つにして扶け合ふにあり、これも上に賢明なる君主が在しまして、萬の民を率ゐさせ給ふにあらず



んば、困難なことであるかも知れないけれども、仁慈の御ころ深き陛下の如き御方の下にあつては、自然國民は親和であるべき筈、聖慮如何に御嬉しくわたらせ給うたであらう。

【三二六】 同

事しあらは火にも水にも入らばやと

思ふはやがて大和たましひ

平素は隠れて見えないけれども、一旦事あるの日に遭遇しては、火の中でも水の中でも敢て辭する所にあらず、飛び込んで渾身の力あらむ限り國の爲め君のため、盡さうとするのが、とりもなほさず日本魂である、事しあらばの「し」は意味を強くするための語、事あらばと言ふのという意味同



じ、我が敷島のやまと心を咏み出でさせられたものである。

【三二七】 同

千萬の民のころも治まらむ

まこと一つをもて教へなば

幾千萬の我が國民を治めるに就ては、いろ／＼に困難なこともあるであらうけれ共、唯一つに誠のころを以て教へ導いて行つたならば、如何に多くの民と雖も、悉く歸服して充分に治めて行くことが出来るであらうとの意▲實に誠實の前には、邪敵も及を向け兼るもので、況むや國民の仰慕し奉つる陛下が、神に通ずる誠の大御ころを以て、惠の露を普く民草の上に灑がせ給ひて、萬民を等しく愛撫し給うに於ては、誰れ

雜



あつて歸服し奉つらぬものが有らうか、邊土新附の蕃民でも必ずよく治まつて行くに相違無いのである。

【三一八】 同

いかならむことに逢ひても撓まぬは

わが敷島のやまとたましひ

如何なる困難苦痛に出會つても、更にそれがために撓み屈することなく、益々勇を鼓して、困難と闘ひ、苦痛に抗して、總ての障礙を排し、迫害を斥け、以て最後の勝利に向つて奮進するのが、これ即ち敷島のやまと魂であるとの意▲わが敵島の日本魂こそは、實に日本民族固有の大精神であつて國粹の最純なるもの、これあつて始めて我が日本の特殊の價値



が生じ、光彩を添へるのである。

【三一九】 同

檀原の遠つみおやの宮はしら

立てそめしより國は動かす

檀原は大和の國にあり、神武天皇の肇めて御位に即かせたまうた所、遠つみおやとは即ち神武天皇を申されたのである▼檀原の御即位以來、我が國の基礎はここに確立して、泰然更に動かざること巖の如くであるとの意▲宮はしら立て初めしとは、宮殿をお造り道ばされたことである、神武天皇は中國の従がはぬ者どもを悉く打ち平げて、ここに都を定めたまうた、爾來春秋ここに三千載、皇祖の御偉業は益々光輝を發しつゝあ

明治大帝御製謹註  
のである。

三〇二

【三〇〇】同

例なく開けゆく世を見ることも

みちひく神のあればなりけり

明治の御代の開けたる状態は、我が國に於て先例の無いばかりでなく、世界初まつてから稀に見る速度の進歩發展で、守内の國民みな驚異の眼を向けて凝視する有様であつて、斯かる比ひ無き文明の國となつたのも、これ偏に神の御導きがあつたればこそ、げに奇しきは神の御業と、深く神明の加護を感讚したまうた御製と拜し奉つる。

【三〇一】同

敷島の大和島根のをしへ草

神代の種の残るなりけり

敷島のは大和に冠せる枕詞。大和島根は我が日本國をいふ、をしへ草は教育と云ふこと。▼一首の意は、我が日本帝國の教育の根本たる大精神は、決して他から傳はりて來た軽いものではなく、神代から有るものを其のまゝに承け繼いで來たものであると言ふにあり。▲我が國に於ける教育の本義は、即ち忠君愛國の美しき思想であつて大和魂の眞隨を發揮させるのが我が邦の教育の大方針であることは、更めて言ふ必要も無い位である。

【三〇二】同

雜

三〇三

國民も常にこゝろを洗はなむ

御裳濯川の清きながれに

御裳濯川は伊勢大廟の宮域を流る、五十鈴川の一名である、倭姫命が御裳を洗ひすゝがれたに依つて此の名を生じたのであるといふ▼昔倭媛命が御裳を洗ひ清められたやうに、我が日本の國民は常に、此の清き川の流れを見ては心の汚れを洗ひ去つて、正しいまことの心を持つやうになるであらうとの意▲我日本には昔ながらの美しき思想あり、日本の國は何時の代までも此の思想に依つて萬代不易に國を保たねばならぬのであるから吾等臣民は萬一にも我が國體と異なる外國の思想などに迷染して、國家社會の秩序を紊り、制度を破壊する様な輕舉愚動があつてはならぬのである。



【三三三】同

曇りなき人のこゝろを千早ふる

神はさやかに照し見るらむ

清きこゝろには一點の曇も無い、私利に迷はず、私慾に惑はざる時の人の心は光風霽月、眞に澄みたる水の如く、拭うたる鏡のやうである▼曇りなき清き心や誠實の心や虚偽なき心は、假しや世の人には知れずとも、天地を照らしたまふ神は、明かにこれを見そなはせらるゝであらうとの意▲されば世の人々には認められず、頌めうたはれずとも、神はこれに酬ひたまうであるから、人ばかりを相手とせずして、神を見、神に對して己が心を清くし、曇りなきやう心掛けねばならぬのである。

【三三四】同

雜



久方の空に晴れたる富士の根の

高きを人の心ともかな

久方の空に晴れたる富士の根は、崇高の姿は雄々しき極である、久方のは空に冠せたる枕詞、富士の根は富士の峰、見よ、東海、天、空、青う澄みわたつた雲の外に屹然として立つ威風堂々たる山容の何ぞ清かにして高き、人もまた此の富士山の高く清きが如く、その心を高くし、清くして行きたいものであるとの意。

【三三五】 同

國民の上も心に任せぬは

雨とあらしの憂なりけり

何ことも思へば思ふ如くなる民の身の上のことも、只雨と嵐だけは思ふ様にならぬ憂ひであるとの意、これは、暴風雨のために國民が苦しむさまを思いやり、嘆かせたまうた時の御製であらう、げに、陛下の大御徳は、普く國の隈々にゆきわたつて、國民は畏多くも、陛下を慈父と仰ぎ、また、陛下には國民を赤子のやうに慈みたまひ、上下心を一つにして、國運の進歩發展に努めて行くのだから、世に何とて大御ことろのまゝならぬものは無い筈であるが、只不時に来る暴風雨の天災ばかりはまた如何ともなし給うことの出来ぬこと、唯これのみ思ひ煩はせられたのである。

【三三六】 同

白雲のめぐりく／＼てさま／＼の

國のすかたも見えて歸らなむ

白雲は一ヶ所に永らく停まつて居ることなく、世界中の各地を下に看て  
休むことなく廻りて歩くから、さまざまに異つて居る各國の狀態を廻り  
て、抜目なく充分に視察して歸れよとの意▲陛下は日夜自國他國の  
事共を御念頭にして居らせられた其餘り雲にまで心の有るもの、如く假  
へて御詠し給ふたのである、又此御詠は歐米視察などに旅立の人を送ら  
せたまひしほどの御詠とも拜し奉る。

【三三七】 同

子を思ふ夜半の鳥の寝ねかてに

明る遅しと鳴きわたるらむ

まだ夜もあけぬに鳥の鳴きわたるのは、子を思ふこゝろの深い餘りに



夜あけを待つことが待遠くて、夜の目もねむらず、待ちわぶるのであら  
うの意▲御枕に夜鳥の啼く聲を聞きたまうた折り遊ばされた御即事であ  
らうと拜察し奉る。

【三三八】 同

廣き世に交りながらいかなれば

せまきは人の心なるらむ

廣き世の中に交つて居れば、人はこゝろも自ら廣くユルやかに持つて行  
けさうなものであるのに、いかなればかく狭いのであらうとの意▲心慮  
ければ何事にも寛大に、悠々迫らざる態度を持つて居ることが出来る  
けれども、心の持方が狭ければ、物に心を動易くして、少しのことに

雜

不平を起し、怒り、悲しみ、憂ふるなど、見苦しいことが多い、畏多けれど、陛下には、かゝる有様を御嘆息あらせられたのである、いかなればとは如何なればと云ふ事。

【三三九】 同

桐火桶かきなでながら思ふかな

すき間おほかるしづか伏屋を

桐火桶は桐火鉢のこと▼宮殿の奥深う、炭火ゆたかな桐の火鉢を抱いて、静に灰の中の炭を掻き撫で、居れば、冬の寒さも幾らか凌げる暖さで、あるが、これにつけても思ひ出すのは賤民の家であるとの意▲風も隙の多き家に住んで居る賤民等は、夜も碌々にねむられず、如何ばかり寒

いことであらうとは、げに辱なき大御心ではないか、しづか伏屋とは賤民の起伏する家のことである。

【三三〇】 同

駒に乗る技はいかほど進むとも

つまづくことを願みよかし

乗馬の技術は如何ほど熟達したからと言つて、決して安心はしてはならぬ、兎もすれば油断大敵、馬は躓くこともある、されば如何に巧みに馬を扱ふ手練の技を備へて居やうとも、其れを誇として、無暗なことをする時には、却つて大なる失錯を招くことがある、よく注意しなければならぬとの意▲世才に長けた者や學識に富んだ者や技術に巧みな者や

雜



明治大帝御製謹註

三一二

財に富める者や、其他會社銀行官公衙の上役等如き何でも人より優れた者には此御製が絶好の訓戒であらうと拜し奉る。

【三三二】同

おもほえず夜を更かしけり國の爲め

たふれし人の物かたりして

國の爲めに盡す忠義の心から、身命を擲つて、今は亡き數に入れる人々の上を、あれこれと物がたりして、思はずも夜を更がしたことよとの意  
▲國家に殉難したる忠臣義士や軍人共をいと哀れに思し召されて、近侍の人々を御相手に、夜ふくるをも氣づかせたまはで、さまざまの御物がたりせらるゝ時には御涙も催ふし給ふことも多かつたと漏れ承はる。



【三三三】同

白露のおきふしことに思ふかな

たみの草葉の榮行かむ世を

白露のと云ふ句は置くといふ語の枕詞であるが、置くと云ふ語音は起くと云ふ語音に相通するから起くといふ語にも冠せるやうになつたものである。たみの草葉とは蒼生、即ち青人草、天下の萬民を宣はせられたもの  
▼一首の意は、起きても寝ても、思ふは天下萬民の榮えゆくやうにと、只これのみであるといふにあり▲國家人民の上を幸多かれと祈りたまう外には、更に何事もお考へ遊ばされないうで、朝起きる度に、また夜寝る毎に、夢にも現にも、此の事をのみ念頭に置かせらるゝ辱けなき、申すも畏れ多い次第である。

雜

三三三

【三三三】同

神代より受けし寶をまもりにて

をさめ來にけり日の本つ國

神代より受けし寶と申されたのは三種之神器である、これは天皇の御位に即せ給うと共に御歴代に傳へ傳へし給うて、神の御代から今日に及んで來たもの、此の三種の神器を守護と頼んでわが日本の國を治め來たよとの意▲日の本の國は、日の本つ國といふに同じ、日夜唯皇祖皇宗の御遺訓を奉體したまひ、御遺徳にたよらせ給ふ大御こゝろの程を咏しさせ給うたものである。天祖 天照皇大神より傳はり來れる三種之神器の事は、國祖報徳會の「國祖」と云ふ冊子に詳しく奉記してあるから茲には詳記の必要は無からう。と思ふ



【三三四】同

國民のことはの花をわが窓に

集へて見るが樂しかりけり

ことは。花は歌のことである、是は年々の歌御會始めの折り、國民の歌進する歌を御歌所に於て製本の上、奉つらしめたまひ、日夜萬機を總覽あらせらるゝ御暇に、御覽あそばさるゝことが、如何にも樂しいことであるよと仰せられたものである▲國民の赤誠をこめて咏進しまゐらす歌は、毎年幾萬の多きに達し、これを悉く御覽あそばさるゝには、二三ヶ月もかゝるやうに漏れ承はる、これ等の歌を一々御覽遊ばされる時は、直接その咏者と面を合せたまうやうな御心地にもならせらるゝことがあつたであらうと恐察し奉つる。

雜



【三三五】 同

おのが身をかへりみずして人のため

つくまや人の務なるらむ

我が身のことばかりを顧みずして、人のため、人の利益幸福のために盡すのが人の此の世に對する務めであらうとの意▲かく世の中の人々が總て、自分のとのみを顧みず、他人の上をも思つて、他人を扶け、他人の爲めに全力を注いで親切を盡すならば、世は眞に睦しく平和に、樂んで月日を送ることが出來やうけれ共、若し之れに反して、各々自分勝手のことばかり考へて、私利私慾を計るに餘念なかつたならば、世は忽ちに紊れて、人々の間に紛騷は絶えぬやうになるであらう、げに人の務は、己れを顧みず、他の爲めに盡すことである。

【三三六】 同

上つ代の御代のおきてを違へじと

思ふぞおのが願ひなりける

上つ代とは上の代即ち上古の代をいふ、上つ代の御代と重ねたのは、上古の御代といふ尊んだ詞、おきてとは皇祖の御遺訓であつて即ち明治貳拾三年の教育勅語も皇祖の御遺訓である▼何ことを成すにも、唯願ふところは、皇祖皇宗の垂れたまうた御教に違ふまいとの一事であるとの意▲國民に對せられては、寛容仁慈、ひたすらに御歴代の帝の御慈訓を承つがせたまうて、至らぬ隈もなく御恵みの露をそゝがせ給ふたのである。

【三三七】 同

朝煙たちそふ末に知られけり

民のなりはひ進みゆく世は

朝なくくに立ちのぼる烟が日に増し、月を追うに従つて、數多くなつて行くのを見ても、國民の生業が愈々進んで行くことが推察し得られるとの意▲宮城から市内や市外の民家を見下させたまうて、御こゝろに思ひ浮べさせられた處を御咏みいでたまうたのであらうと拜し奉る。

【三三八】 同

親も子も親しみかはし家の内

にぎはへるこそ樂しかりけれ

家庭の和樂は人生最大の幸福である、此の御製は此こゝろを御咏み出で



させたまうたものである、賑かに美はしい家庭に住む人は、氣も伸び々々として春のやうであるとの意▲これに反して、家族の内に争ひ絶えず、常に平和を缺いた家庭の人は、如何にも物足す、淋しげに見える、兎角家庭を争ひなく平和にしやうとするには、親は親、子は子として、その他家族すべてが、各々その務めを盡し、本分を守つて行けばよいのである。斯くするには一家の主婦たる者の責任が最も重大である。

【三三九】 同

鬼神も泣かするものは世の中の

人のこころのまことなりけり

鬼神とは心の荒々しき神で少しの優しいところも無き恐しい神をいふ▼

雜





斯くの如き鬼神をも泣かするものは、世の中の人の心のまことであるとの意▲まこととは至誠と云ふことで偽なき心である、心さへ至誠に満ちあふれて居れば、如何に冷酷残忍といはるゝほどの者でも、感動して心も解け、自ら涙をも催すものである、至誠の力は如何に大なるか、世に尊きものは、人の心のまことである。

【三四〇】 同

天を恨み人を咎むることあらじ

わがあやまちを思ひかへさば

常に自分を顧み、自分の過失を自覺しさへすれば、假令自分の意志に反したやうな出来事が発生したとて、決して天を恨む必要も無ければ、人



を咎めるにも及ばないとの意▲然るに世には自己を省みること知らず、自己の過失缺點に氣つかずして、只他人をのみ責め、不人情を怒り、残酷と罵り、さては天道是か非かなどと、公平無私なる神を恨むやうな人もある、これ等は實に誤まれることも甚たしいものである、自己を省みれば、事の失敗齟齬した原因は、必ず自分に在るに氣づく、されば人は自省の徳を缺いて居てはならぬ。

【三四一】 同

分けはやと思ひ入りぬる道にこそ

高きしをりも見えそめにけれ

人一度心を決して、此の道に分け入り、その奥を究めやうと思ひ立てば、





明治大帝御製謹註

三三二

こゝに光明も生ずれば高き希望も輝くとの意▲前途に向つて邁進すれば、必ず目的の彼岸に到達することが出来る、されば當初に於て決心したならば何處までも其の決心を翻へすことなく其道に奮闘努力することを怠つてはならぬとの貴き聖訓である。

【三四二】 同

たらちねの親の心はたれも皆

年ふるままに思ひ知るらむ

子の爲めには親は其の身の幸福を捨て、惜しいとも思はず、如何なる憂き苦勞にも喜んで耐へる、世に子を思ふ親の心ほど有り難く尊いものは無い、さりながら、人なほ年わかき頃は、この尊き親の心を知らず、親が



子を思ふ百分の一も子は親を思はぬものであるけれども、子が次第に年をとつて行くに従ひ、親の慈悲が漸く心に會得されて来るものであるから、さうなると始て親の愛情の限り無く濃かであることを感謝するやうになるとの意▲思ひ知るらむとは知るやうになるといふこと。年経るまいとは年を取るに伴れてと云ふこと。

【三四三】 同

世の中の人に後を取りぬべし

進まむ時に進まさりせば

進むべき時に進まない、身は一處に留つて、時勢の變遷に伴はず、世の中の人に後れて仕舞うだらうとの意▲殆に今日の如き日進月歩の時代

雜

三三三



に於ては、世の中は三日見ぬ間の櫻かなで、少しでも油断をして居ると、世の狀態は急轉直行、思ひもかけぬ所まで進歩して行く、世の進歩に後れたものは、世に立つて何事をも成すことが出来ないで、人の後にばかり附いて居なくてはならぬから、身體が元氣で物事に進み働く勇氣のある青年の時代に一生懸命働かねばならぬのである。

【三四】 同

思ふこと思ふがまゝになれりとも

身をつゝしまむことを忘るな

思ひのぞむ所のこと首尾よく成就して、思ふ通りになつたからとて、それに安心し、満足するばかりでなく、却つてこれが爲めに慢心を生じ、



氣を高ぶり、身の行ひを放埒にするやうのことあつては、折角成し遂げた心の思ひを空しくすることになるから、身をつゝしまむことを忘すればならぬとの意▲世間にはこの聖訓に反するやうな人々も少くないが、注意すべきことであると思ふ。

【三四五】 同

何事も思ふがまゝにならざるが

かへりて人の身の爲めにこそ

世の中のこと總てが自分の思ふまゝになるやうであつたならば、世には競争もなく、進歩もないのであるが、何ごとも思ひ通りにならねばこそ、奮發心も出来、勇氣も出で、こゝに研究心も出で、努力も致し歡びも樂みも湧いて來るのである、苦多ければ樂もまた多しと昔の人も言つたやう

雜



に、障礙を排し、壓迫に抗して、自己の運命を開拓し、かくて目出度く成功の彼岸に達し得た時、始めて人は眞の嬉さを感じるのである、されば思いのまゝならぬ世が、却つて身の藥となるといふ意。

【三四六】 同

思ふこと思ひさだめて後にこそ

人にもかくといふべかりけれ

心に思つたことを、そのまゝ直に言つて仕舞ふやうなことをすると、後になつて悔ひても及ばぬやうなことが出来るものである、されば人は誰れも、心に思ふことは幾度もく心の中に繰りかへして見て、決して後悔するやうなことは無い、大丈夫であるとの確信を得て、初めて其事を



發表す可きであるとの意▲諺にも口は災の門といひ、昔の人も口をつしめと繰りかへして教へて居る、思ひさだめてとは、充分よく考へての上でといふこと。

【三四七】 同

開けゆく道に出でしも心せよ

つまづくことのある世なりけり

今は文明の時代である、自由の世である、交通開け、産業興り、教育普及して、百般の制度よく備はり、人はその心の欲するがまゝに、如何なる方面へでも活動の手を伸ばし足を擴げ得らるゝ時ではあるが、人生の行路は由來難いもので自由なるが如くして自由ならず、思ひのまゝなる



が如くして思ひのまゝにならぬ浮き世の中である、一見自由なるが如く、思ひのまゝなるが如きに、心を輕卒にして、思慮なき行動を執る時は、忽ちに失敗するものであるから、よくこの邊の注意を怠つてはならぬとの意▲此の御製はこのころを大道にたとへて、失敗をつまづくことに諷して咏み出でさせ給うたものである。

【三四八】 同

思ふこと貫かむ世をまつほどの

月日は長きものにぞありける

われ必ず之れを成し遂げむと、一度志を立て、奮進努力、日々營々として力を盡すが、さて目的の彼岸に達し得べき日は仲々前途遠遠なもので、



その日は茫々として久しき後の彼方にあるのである、これを待つ間の月日は如何に長く感ぜらるゝものであるとの意▲心屈して中途で目的を放棄する者も世の中には尠くはないが、かくの如きは薄志弱行の徒で到底成功の喜びを得ることは出来ない、唯屈せず、撓まず永き奮闘に耐へ忍んで待つ者に成功の冠は與へられるのである。

【三四九】 同

家富みてあかぬ事なき身なりとも

人のつとめを怠るなゆめ

家に巨萬の富を積み、身は自由安樂に、何一つ不足のない境遇になつたからとて、人の人たる務めを怠つてはならぬとの意▲假令自己に對し家